－文 芸－

草の丘

第 二 号

2012 年 5 月　印旛文学の会

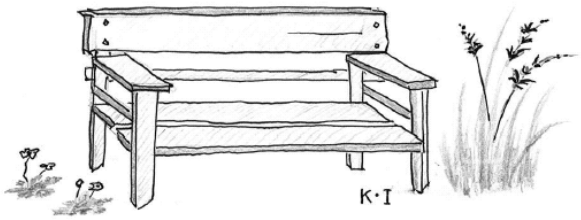
文芸

草の丘 第二号（二〇一二年 五月）

目次　草の丘 第二号

《短編》
父がいない兄の帰る場所　いんば華子 …… 一
《短編》
野バラ　中川とら …… 一四
《連載ＳＦファンタジー》
アプとズコ（ＡＰＰＵ ＆ ＺＵＫＫＯ）―第二回―　香取 淳 …… 二三
《詩 三篇》
待ちぼうけ　中川とら …… 四二
草深の原
無題
《小説》
太鼓持ち　唐瀬 光 …… 四四

（表紙　香取 淳　カット　中川とら・唐瀬 光）



父がいない兄の帰る場所

いんば　華子

大学の合否発表に一喜一憂している時期だった。久しぶりに兄から連絡がきた。なんか奢ってやるから東京まで来いと言うのだ。

兄からは大学を卒業してから定職に就いたという報告を受けていない。進学と同時に長男で東京の奥に大学があるから、と一人で暮らし始めた。そのまま実家に戻ることなく、向こうで暮らしている。おかげで私は、母に実家通いを強要された。受けたのは都心部の大学だし、女の子だし、北総線で通ってくれた方が安心だと言うのだ。確かに、二人兄弟のうちもう一人にも逃げられてしまっては、母の立つ瀬がない。母はほとんど女手一つで私達を育てた。成田市の職員で周辺の地方公務員よりも給料はよかったが、教育費、生活費、子ども二人分の私大の学費、栃木に残してきた両親への仕送り……母は色んなものを我慢して私達に充てた。気丈で気風もいいので、疲れなど感じさせる人ではなかった。それでも一番相談相手となれる人が近くにいないのは辛かっただろうと思う。我が家に父はいない。

母に対してそんなことを考えられるようになったのは最近で、私もそれなりに大人に近づいたことだと思う。

私は一家最大の悩みの種である兄からの呼び出しに応じることに

した。二年近く顔は合わせていない。母は、兄が何やってんだかきっちり報告するようにと私に任務を言い渡した。最低限、誰からも追われてなくて、仕事をしていて（あやしい組織ではない）、屋根のあるところで生活できていればいいのだ。これはあくまで最低限の話だけれども。

兄は現在二十四歳、林ユズルという。大学時代はどうだったか知らないが、女っけのない地元の男子とばかりつるんでいる人だった。学校が終わるとイオンのゲームセンターやモアのボーリング場に入り浸っていた。それはそれで楽しそうだったけれども、何歳になっても小学校低学年の遊びの延長のような過ごし方が、私は嫌いだった。少しだけ移動範囲が広がって、もう少しお金をかけて、遅い時間まで遊び歩く様になっただけだ。母の帰宅時間が遅いのをいいことにしたい放題だった。女を連れ込むとかしてお前外出てろ、と私を追い出すことがなかったのは、少しもモテなかった容姿と、いつまでも子どものように遊べる無邪気さのおかげだろう。

私は幼かった兄の才能が埋もれてゆくのをみた。小学生の時兄は夏休みの工作で校長賞をもらった。勉強の方はからっきしのくせに、指先を使う作業の集中力は人並みではなかった。何より本人が楽しんでいたし、毎年評価されることを楽しみにしていた。夏の暑い日が続く中、何日もかけてひたむきに作業する兄が私は少し怖かった。一日かそこらで終えてしまうようなことを、兄は誰よりも時間をかけてやった。仕掛けも巧妙で、手作りの歯車をいくつか作って、団扇仰ぎ機を作ったこともあった。廃材を集めて作ったロボットの時もあった。発想が豊かで、夏休みが終わった後、兄は学校の話題の人だった。

しかし、中学生ともなると状況が変わった。夏休みに工作の課題はなく、数学の復習ドリルやまだまだ定番の読書感想文が続いた。美術や技術のような授業は、課題に出されたものをいかに適当にやって、友達と話す時間に充てられるかが優先される。技術の授業も限られた時間の中で、みんなと同じものを作らされる。誰も兄の新作をみることはなくなり、兄も作らなかった。

兄は、ばかだった。バカでも馬鹿でもなく、平仮名で書くのがちょうどいい、無知で考えが足りないばかだった。好きなら、遊んでいる時間や勉強しない時間を好きなものを作る時間にすればよかったのだ。けれども中学生で周りに刺激になるような友人がなく、憧れ夢中になるほどの芸術家自体を知らなかった兄は、ただ遊ぶしかなかった。

低空飛行の成績はそのままで、大学全入時代の今日、幸運なこと

に兄を擁することのできる大学があった。国民の三大義務や現職の総理大臣の名前すら答えられないくせに社会学部を卒業してしまった。しかし新卒採用枠は年々厳しさを増し、さらに兄には就活をするという能力が備わっていなかった。適当にやって滑り込んできた試験とは違っていた。学力では到底かなわない試験はとうに諦めていた。結局卒業までに一つも内定をもらえず、派遣会社に登録することになった。大卒と言っても使えるような資格を一切取得していなかったので、ちょくちょく仕事を変えながら働いているようだった。

三月半ばを過ぎようというのに、まだまだ風は冷たかった。私はダウンジャケットの下にセーターも着込んで、羽田行きの電車に乗った。白を基調とした綺麗な車内には、成田から都内へ向かおうとする観光客がほとんどだった。カラフルなスーツケースが通路の白い部分をマス目のように埋めていた。私は適当な席に座ると、携帯で乗り換えを調べた。兄とは池袋で待ち合わせだ。都内にほとんど行ったことがないので、兄にすぐ会える自信はなかった。メールでは迎えに行くからとりあえず改札出て、目立つ所にいろと言われていた。電車はまっすぐ、スピードを出して東京方面へと向かう。京成線に入るまでいくつもの駅を飛ばしてゆく。私の暮らす街を、後ろへ追いやる。今、どこを走っているのか分からなくするためのように四六四号線が線路を挟んで脇を固めている。時々白い石壁の上の方にニュータウンの商業施設が顔を出して、わざとらしく現在位置を教えてくる。イヤホンをしてウォークマンをかけると、もうどこにいるのも同じだった。

『着いたよ。今、東口』

駅についてメールを打つと、兄から電話が来た。

「着いた？　俺も改札の所にいるんだけど、ちょっと探して」

日曜日の池袋は都内の大体がそうであるように、とても混んでいた。縦横無尽に人々が行き来していた。誰が改札から出入りしても同じようなただの流れは、自動改札機だけが個人を特定しているようだった。兄の声は数か月前来た電話と同じで、聞いていていらつくようなへらへらした口調だった。人ごみの中から見つけた頼りなさそうな兄の姿も同じで、若干体がたるんでいた。

「おう、二年ぶり」

「実際、会うのはね」

兄はすぐ近くにあるイタリアンレストランへ私を連れて行った。昼時を過ぎていたので、すぐに入ることができた。私がスープスパ

ゲッティとマルゲリータピザが食べたいというと、兄は両方を注文して、兄から一切れだけピザをもらった。

「兄ちゃん、今何にやってんの？」

会話の始め方を躊躇するのが面倒くさくて、藪から棒に会話を始めた。いきなり答えづらい質問するのか？　と兄は思ったのか、少し間をあけて兄は答えた。他にする話題もないのだから、せめてこの質問だけには答えてもらいたい。

「うーん、ほとんど派遣てか、バイトのようなもんだけど、夜間工事の交通整理とか、駐車場の警備員とか、夜間の仕事か、それこそ夜間工事の現場でちょっとね」

あ、絶対彼女いない。と分かった。普通の人と逆転した生活で、遊びに行ったり、一緒に暮らせることないだろう。服もくたびれていて、身だしなみに他人の視線が介在しているとは思えなかった。

「あ、でも、生活は何とかやっていけているから。給料まあまあるし、結構一つの場所続けているし」

「ふうん」

反応にちょうどいい言葉が見つからないと、私はすぐふうんと流してしまう。何か言えればいいのだけれど、暮らせているというのなら、私は何も言うことはない。兄の生活に口出しをしたいわけではないので、兄の話を聞いていないとか、怠慢だとかではないと思っている。

「あ、これは俺からなんだけどさ、高校卒業する陽子に話があるんだ」

兄は一呼吸置いて続けた。

「もう、大体わかっていると思うけど、オヤジさ、俺が大学入るのと同時に帰って来なくなっただろう？　あれ、離婚したんだよ」

少し前に母から離婚の件は聴いていて、私は驚かなかった。兄は、私に答えにくい質問の仕返しのように思っていたのかもしれないが、的外れだった。

「知ってる。この前母さんから聞いた」

「え？　なに？　そうなん？」

母は、兄には大学に上がる時に教えていて、陽子には高校卒業時に教えようと二人で決めていたそうだ。

父と母は離婚している。父は兄が大学に入る時にでていった。昔から仕事一辺倒で、父と遊んだ記憶は小学校の時にやった追いかけっことザリガニ釣り位しかない。父の週末は、仕事か人に会う（これもまた仕事）と言って家にいることは少なかった。私達は、父について何も知らなかった。大人がしている『仕事』を理解するには

幼すぎた。父の置かれた立場を想像する力もなかった。家の中に父の役割はなかった。たまに夕飯を作れと言われて、仕方がなく餃子を作る位だった。家で役割を努めようとしなかった父がいけなかったのか、役割をきちんと与えなかった私達がいけないのか、父と家にはいつも距離があった。子どもの知り得る家族は大抵一つしかない。印西市のニュータウンの一角に住む林家しか知らない私は、父とは家から離れていて、何をしているかわからない、時々餃子を作って、出張を繰り返すうちに消える。それが父だと思っていた。

父は、〝父〟という称号だけをもって、この家から出て行った。しかし携帯電話がある限り連絡はいつでも取れるのだ。〝父〟とアドレスに登録されたまま、ごくたまに液晶画面に表示される。父が家に残していったのは、自室に残した学生時代からの大量の古本と仕事の資料。趣味だった釣り用具一式とＳＦ映画のビデオだ。

「なんだ、母さんが先に言ってたのか」

『兄ちゃんは、父さんと母さんが別れたことどう思っている？』

ホームドラマにありがちなセリフを心の中で唱えてみた。実際、両親の離婚を経験した兄弟に、こんな会話はない。お互いにどう思っているなんて、確かめたりはしない。どう思っているかお互いに話してみて何か変わるのか？　得られるものでもあるのだろうか？　ドラマには話の終わりがあっても、私達の生活は、それと比べれば果てしなく続く。蛇足も多く、まとまりなんてない。いちいち身に起こる事象について感情を持ったり考えたりして共通認識を作っている余裕なんてない。私は私で、両親が離婚した事実は知っている。何も反応せずにスパゲッティを食べ続けると、兄も理解したよう

だった。静かに私達の食事は続いた。

兄弟のいいところは、気を使う必要がないところだ。どんなに軽い話もシリアスな話も、どうでもよい事象まで、ごちゃ混ぜにして話が四方八方に飛び火しても、相手の気持ちがついてきているかなんて気にしなくていい。兄は大学時代に深夜アニメにはまって、私もサブカルチャーが好きなので、ここ数年のアニメについて語り合った。あの声優がどうだ、アニメより原作漫画の方がいいだとか、兄弟だから同意も批判も、自由だ。どうでもいい話題であっても、自由に意見が言える関係はなかなかない。友達であれ、友達である限り不自由があるのだ。

兄も私も、久しぶりに直接会えたことはよかったと思っている。しかし兄は、話題の途切れる沈黙の中で、胸から何か吐き出そうとする様子があった。そういえばさ、と兄が話し始める度に、意にそ

ぐわない事柄が口から出て来ているようだった。
「本当は、大学あがるのを機に俺の部屋を陽子にして、俺は職場の近くとかで部屋借りて、お前の下宿代も払うつもりだった。うまくいかないな」
そうぼそりと言った後、兄は煙草に火を付けた。前に会った時は煙草なんて吸っていなかった。このことが言いたかったのかな？と思ったが、そのあとも胸につかえたような話し方が続いた。
暫らく店にだらだらと居座っていると、兄の仕事の時間が近づいてきた。店を出ると兄はすぐにまた会える時はないかと聞いてきた。
「バイトも短期のはもう終わっちゃったし、暇なんだけど、卒業式終わってからがいいかも」
そういうと兄はまた仕事前だけども、と日時を指定して、また改札の所で待ち合わせだと言って駅へ向かっていった。私は行き交う人々のなかの、一人になった。駅周りを少しだけ散歩してみたが、迷いそうになったのですぐにやめた。あと十数日もすれば、毎日東京へ来るのだ。人とすれ違うたびに自分の身から何か大事なものが剥ぎ取られて小さくなってゆく気がした。一人で歩くことがこんなに心細く辛かったことはない。兄は少しも変わらずに、どうやってここで生活してきたのだろう。
最後に兄が実家に帰ってきたのは私が高一の終わりくらいだった。私には彼氏がいた。兄は就活を卒業ぎりぎりまでやると言って、東京の部屋を離れなかった。就職は都内ですると決めていた。ちょうど兄が帰っていた日、私は彼氏と遊んだ後交通費が足りなくて、兄に原付で駅まで来てもらった。割り勘でホテルに行った日だった。彼氏と別れた後は一人で電車に乗って帰った。彼氏の家とは方向が違うのだ。最寄り駅近くになって、手持ちで足りないことに気付いた。
「なんで金なくて遊んで帰ってくんだよ！　」
原付で二ケツしながら兄が聞いてきた。
「だからー、ちょっといいランチ食べて、そのあと映画行ってプリ撮りまくってたらさー。高校生も大変なのー。付き合いがあるのー。てか、北総線、高校生には無理ー」
お前みたいな子どもともう違うんだ。男子だけでつるんで遊んで、だけじゃないんだよ！　ばか！　兄の少したるんだお腹に腕をまわして、肩甲骨らへんに向かって悪態をついた。就職できないなら彼女くらい作って連れて来い！　兄の背中だけは無駄に広くて、私を風から守るのには十分だった。

卒業式の前日、父からメールが来た。明日時間があったらご飯行かないか、というのだ。場所は都内。私は卒業式で打ち上げもあるからといって断った。

兄との約束の日、仲のよかった友達と行った卒業旅行のお土産を持って家を出た。入学式まで数日と迫っていた。結局第一志望の大学は落ちてしまった。入学が決まった大学の校舎は池袋にあった。兄が待ち合わせに指定するのは二回とも池袋だから、これからはずっと会いやすくなるだろう。実際会うのかは別にして、監視の目が置かれるのは母にとっては好都合となった。前回あった時に兄の様子について説明すると、母は少し安心したようだった。夜間の仕事に体を心配していたが、とりあえずは自分の稼ぎで自立できていることが確かめられた。母はそれだけでも十分だったようだ。

前回会えた所に立っていると、兄が小走りでやってきた。カフェでいいか？　と今度は駅から少し離れたカフェへと連れて行ってくれた。東京はどこへ何時に行っても人で溢れている。千葉県の中にいる感覚とはまるで違っていた。店をいくつか周り、カウンター席に空きがあったカフェへ入った。

「この前、ご飯行っただけだったから、これ、やるよ」

兄は小さな手提げ袋をよこした。どこかの店の名前が書かれていて、印字のデザインからすぐにアクセサリー系の店だとわかった。ブランドに興味のない私でもわかるような有名高級品ではなかったが、小瓶と三日月のモチーフがついたシルバーのネックレスだった。大学行くときとか、あんまり気負いしなくて使えるだろう、と兄なりに考えてくれたらしい。今まで付き合ったことのある人たちは、アクセサリーなどくれたことはなかった。高校生でお金がないのはもちろんだけれども、やはり気恥かしいのだと思う。妹だからといってもこういうふうにアクセサリーを買えるのは、兄が相応の年齢であるからだ。もしかしたら、大学時代に彼女の一人くらいいたのかもしれない。

「ありがとう」

お店で買うの、恥ずかしかっただろうな。きっとそれなりの値段がするんだろうな。もしかしたら、私が今まで身に付けたものの中で、一番高いかもしれない。いろいろ思ったけれども、言えることはありがとうだけで、代わりに、大切に使おうと誓った。兄から、初めて貰ったプレゼントだった。なんだか首の回りがもぞもぞとして痒いような気がした。私は結構嬉しいのかもしれない。そのお礼には釣り合わないかもと思いながら、お土産のおせんべいを渡した。

旅行先の温泉地名がプリントされていても、どこにでもありそうな醤油せんべいだ。
スツールの椅子に足をかけたり外したりしながら、カフェラテを飲んだ。人が多い街で店内が混んでいても、カウンター席に座って人の流れを見ていると、店内の時間の流れはゆったりとしていた。
徐に兄がカップをソーサーに戻し、スプーンでかき混ぜながら話しだした。
「陽子、俺この前言いたいって、いや、言わなきゃいけないって思っていた事、言うよ」
「え？　なに？　どうしたのいきなり？」
アクセサリーなんかくれたところで気づけばよかったのだろうか？　久しぶりではあったが、前回会った時の態度や、プレゼントをくれたこと、いつもの兄がすることではないのだ。両親の離婚の話でも、好きなアニメの話でも、今の仕事の話でもない、別のことなのだろう。私は初めて、この三つの話が同価値として並ぶことに違和感を覚えた。回りくどい前置きを必要とする、これから兄が話そうとしていることが話題に層を付けたのだ。兄は、話そうとするのに強い決意と時間が必要だった。話される相手である私は、その衝撃を和らげるために、あのネックレスを渡されたのだ。カフェの雰囲気も、私の目の前にある甘ったるいカフェラテもこのためなのだ。
「俺、あと半年ぐらいすると、子どもが生まれるんだ」
「……え？」
私はあまりにも予想外だった話に、開いた口がふさがらなかった。
「や、違うよ、産むのは俺じゃなくって……」
兄は張り詰めた空気を和ませようとしたようだが、私は頭の中が真っ白になっていた。つまらない冗談に笑いはない。兄は自分の言ったことを無理に引き継いで続けた。
「産むのは、女の人。前に飲みに行ったときに会って、それで少し続いていたんだ。俺、就職うまくいかなくて、やっぱりやべーって思って焦っていて。友達、東京に残っているのもいるけど、地元帰ったり地方行ったりで、ほぼ一人だったんだ。残っている友達だっていつも自由に会えるわけじゃねえし」
兄はカップを口に運んだ。一口飲んで、息を吐いた。
「俺は寂しくて、その女の人四十近くてお金ちょっとあったし、俺みたいな若い子ならいいって言うからさ」
兄はだんだん、歯がかみ合わないような口調になって行った。頭の半分じゃ、自分が何を口走っているのか理解できていないようだっ

た。
「ごめん、俺、少しの友達にしか言えてなくて。家族、絶対誰かに言わなきゃって、でも、母さんには…」
兄はうつむいて鼻をすすった。カウンターの上には数滴涙が落ちていた。涙を流すほど感情的になっている兄を見ているうちに、私は平常心に戻りつつあった。
「ねえ、どうすんのその、子ども。母さんに結婚するって言うの？」
「子どもは、俺が引き取るんだ」
「はあ？　その生む母親はどうなるの」
「女の人、婚約者がいるんだ。大手の会社で、部署の先輩なんだって。その人、俺の子だって知ったら、育てないって。でも女の人は生むって決めてて、そうしたら、もう、俺が、俺しかいないじゃないか」
私は溜息を吐いた。呆れたというのではなくて、吸ったままの息が詰まってしまったのだ。呆れると思えるまでは、時間が必要だった。兄は肩を震わせた。店内の食器が立てる音や客席の会話やらで、私達二人が何をしているかなんて誰もわからない。兄はこんなに押しつぶされそうになっているのに、私は何も言えず何もできず、できるのは冷めきったカフェラテを飲むくらいだった。
「失礼します。あの、ユズル君よね？」
後方でしっとりとした声に囁かれて、私は振り返った。細身の女性がテイクアウトのコーヒーカップを持って立っていた。仕事中なのか、落ち着いた質のいい紺スカートに白のジャケットを羽織っている。肩には仕事用のかばんがかけられていた。
受け答えに困っていると、兄が振り返った。
「麻子さん……どうしてここに」
あ、兄の、子を宿している人だ。私は直感でそう思った。
「前の通りを通ったら、見えたから」
にこりと笑った後、麻子さんは私を見た。
「かわいいガールフレンドいるんじゃない。大学生くらいかしら？」
兄は俯いた。妹なんですけど、と言ってもよかったが、ここで言うような場面ではないと黙っていた。
「あの、体はいいの？」
「体は大丈夫よ。ぎりぎりまで働くつもりだから」
「そう、なんだ」
たどたどしくしか話せない兄にイライラした。あんた、捨てられたんだよ。目の前のこの人に。胸ぐらを掴んで言ってやりたかった。
「麻子！」

店の窓越しに、男の人の声が飛んできた。スーツの男性が、自動ドアが開ききるのを待たずして店内に入ってきた。傍に来ると背が高く、スツールに座っていても威圧感があった。ただならぬ様子に背中が凍りついた。

「お前、ずうずうしくまだ会っているのか」

それが兄に向けられた言葉だとすぐに分かった。兄は崩れ落ちるようにスツールから降りた。足はがくがくと震えて、傍から見ても立っている感覚がなさそうだった。

「違います。偶然見かけただけで」

「麻子に近づくな、その面二度と見せるなって言っただろう？　そんなことも理解できねえのかこのバカは」

見ず知らずの私や、周りには客がたくさんいるのに、男性は怒声を張り上げた。兄は何も答えず押し黙った。

「やめて。人が見てるわ」

麻子が男性の側へより、腕をまわした。婚約相手なのだろう。

「条件覚えているだろう？　子どもはお前にやる。気持ち悪くて、お前の子どもが育ってゆくのなんて見られない。麻子の体のためを考えた結果なんだ。次に会った時、子どもを連れて消えろ。いいな」

麻子行くぞ、と男性が麻子の腕を引いた。麻子は先に店を出るように促した。男性は私を見ると「は、一丁前にもう次の彼女か？」と嘲笑して出て行った。

「ごめんなさいね。彼女の前で。私がいけないのよ」

麻子はゆっくりと私達に近づいた。

「麻子さん、それは違います」

「私は、子どもを育てたいと思ったのよ。けれど、彼は反対するし、あなたに何も残らないでしょ？」

麻子は目に涙をためていた。

「すいません、少しお手洗いに」

兄はすぐ戻ると席を立った。顔がボロボロなのはわかっていたけれど、この場に残り続けるのが辛かったのだろう。周りはだんだんこちらを気にしなくなっていて、店内は絶えず人が入れ替わっていた。

「本当にタイミングが悪かったわね。知ってた？　私達のこと」

麻子は兄のいた席に座った。

「ええ、なんとなく」

私は、兄の彼女のような立場で答えてみた。無意識に少し強気になっているのがわかった。私は、当事者ではないのに勝手に巻き込まれている。先に出た男性は、店前の喫煙所で煙草を吸っていた。

窓から少しだけ背中が見えている。
「後腐れは少ない方がいいでしょ。私達は結婚して、子どもはユズル君が育てる。あの子が本気になってたの気付かなかった私も悪いと思っているけど、ほら、時々色んなものを壊したくなる時ってあるでしょう？　それよ」
「……わからなくもないですが、ずいぶんと大がかりですね」
少し皮肉ってみたが、失敗しちゃったのよと、麻子は余裕の表情だった。
「ユズル君悪くないんだけど、結婚となるとシビアになるわ。ユズル君ね、私と会う前すっごく寂しそうな顔していたの。私そういうのに弱いのよ。まあ、あなたは若いから、いろいろこれからね」
兄はすぐに戻ってきた。麻子が目にためていた涙が流れていないことが分かると、表情がほころんだ。救いようのないバカだ。
「ね、子どもの名前考えるから、その名前つけてね」
麻子は喫煙所の男性の背中が向いていることを確認して、兄の頬に触れた。
「あら、彼女さんとユズル君は耳の形が似ているわね」
そう言い残すと、麻子は店の出口へ向かった。
「兄ちゃん騙されてんだよ。あの女、信じちゃだめだよ」
野暮だと思っても、言わずにはいられなかった。兄は震える声でゆっくり口を開いた。
「わかっているよ。でも、嘘でも信じさせてくれよ。何もかもが初めての人だったんだ」
兄は女の人の後姿を目で追った。店の入り口を出て、男性と連れ添って歩く影が消えるまで見ていた。何が初めての人だ。本当のばかだ。ちょっと若くて頭の軽そうな子だからって遊ばれて、捨てられて、ついでに子どもまで作って、その子どもの世話は押し付けられて。
『寂しいなら、一人で生きられない自覚しろよ』
私は兄に、自分は孤独だと言って欲しいのかもしれない。自分の寂しさを、語れる人が必要だと。一人で歩いてゆく自信も、疲れたときに寄りかかれる木々も、帰ってくる港もない。兄も近いうちそんな一人になってしまう。まるで、父のようだ。あの人は、寂しいことにさえ気付かず、家族の中に居場所を見つけられなかった。
生まれてくる子どもの名前は何にしよう。女の人はきっと、子どもだけ置いてゆくだろう。名前を付けられていても、それにすることは私が許さない。兄の帰りつく場所は、兄が見つけなければならないのだ。始めから場所を用意したりはしない。あの女の人の幻影

を残して帰れるようにはしない。すべて兄が決めるのだ。
「兄ちゃん」
「次に会うのは、半年後な。俺たぶん、子連れ狼だ」
いや、もっとかっこ悪いかも。と淡々と言った後に兄は付け足した。潔く実家に帰ってくればいいのに。都内だって実家から通勤できない距離ではないし、探せばもっと近くに就職口が見つかるかもしれない。一人で子どもを育てるなんて、定職もないのに、経済的にも時間的にも難しいに決まっている。半年後会うと言うなら、いっそのこと帰ってきてほしい。離れて暮らしている方が、心配になるような兄だ。兄が帰ると言うなら、私は喜んで迎えに行くのに。かっこ悪い、ダメ人間、一応大卒の癖に。それでも、見棄てる気になれないのは、兄は私の六年先の人生を歩み、少しずつ私に世界を見せてきてくれたからだ。大きな荒波に揉まれ海を渡ってきた。転覆しそうになりながら、今回は派手に転覆して、海に放り出されただけだ。兄の船に消波されながら生きてきた私に、縋る時があってもいい。そんなことされて実際的な支援ができる仕度が私にはない。兄の友達たちの方が（似たようなゴロツキばかりかもしれないが）経済力はあるだろう。けれども、力になりたいと思っていてもいいはずだ。
「じゃ、俺仕事あるからさ」
兄は財布を持って腰を上げた。私もコートを手にとって後に続いた。
駅までの道を歩く途中、携帯の着信がなった。父からのメールだった。
「あ、俺もメールだ」
父からのメールだった。私達二人に送信したようだ。
『久しぶり。今度一緒に食事でも行かないか』
何の装飾もない、感情表現が一切含まれない文章。
「兄ちゃん、時々父さんからメール来る？」
「ああ、都内で働いているからって、時間合うと食べに行っているよ。東京来てから数えるほどしか会ってはいなけれど、地震があったときとか、年末か新年明けたときには、一応連絡くれる」
「ふうん」
「オヤジさ、会うたびに言うんだ。お前はまだ若いんだから、できることがたくさんある。時間をかけたっていいから、納得できる道を選べって」
「お前は若いからって、父さんが私達より年とっているのは当たり

前じゃない。父さんにとって私達はいつまでも若いままだけれど、私は高校卒業するし、兄ちゃんだって、大学卒業して二年になるんだよ。そんなこと言っていたら、生活できないじゃん。父親になるんでしょ？　そんなの、通用しないよ」

父がまさにそんな人だった。母からのまた聞きでしかないが、高校と大学で、浪人と留年を何回か繰り返したと聞いた。不良だったわけではない。学生運動に熱が入り勉強と学校を疎かにした人だった。詳しい仕事の内容は聞いたことはなかったが、稼ぎの悪いフリーライターだったらしい。生活習慣に締りがなく出来上がった父の汚部屋は、上京する前に兄が整理して行った。大量の古本、仕事の書類、学生時代のノートや卒業アルバム。ほとんどをゴミに出し、一部は父に郵送した。ほとんどものがなくなって埃だけになった部屋は、兄の部屋として今もそのままにしてある。

「わかってるって。色んなことに早く答えを出さなきゃいけないことくらい」

兄は口元をあげて笑った。

改札口に来て私はスイカを取りだした。

「陽子、今度三人で飯行こうな。あとオヤジにもたまには会ってやれよ」

〝三人〟とは私と兄と、あと誰のことなのだろう。兄の子ども？　私達の父？

「うん」

メンバーの内訳が分からずとも、私は頷いた。どちらもあり得るし、どちらとも行く甲斐性くらい持っている。

「お母さんに、たまには連絡してあげてよ。心配している」

「なんだよ、これでもたまにはメールしているんだよ。まあ、近いうちに実家に顔出すわ。話さないといけないことがたくさんある。時間をかけてわかってもらいたいこともある。じゃ、気をつけろよ」

兄は手を大きく上げて、私鉄の改札の方へ向かった。兄も〝父〟の称号を手にする日は近い。私はもっと強く生きなければならない、と心に誓った。例えば、〝母〟のように。地面に根を張って、ちっとやそっとではびくともしないように。

父のメールには、いいよと返信した。近頃は地震が多いから、また父からはメールが来るだろう。千葉県で震度三以上になると、大丈夫か？　とメールが来るのだ。〝父〟の称号は、まだ父のものなのだ。

（了）

野バラ

中川とら

四月、裏の土手づたいの桜が散り始め、小さな公園の生け垣下の溝に、風で飛ばされた花びらが、ちょっと汚らしくたまっていた。あたりが薄暗くなるとそれはいっそう白く目立って、誰がお掃除するのかしらと思うほどだ。夕方の公園は、にぎやかな日中とうって変り、人がまばらでしんとしている。

いつ頃からだろう、ブランコに乗って、ゆらゆらと揺られているのが好きになり、学校から帰ると私は雨の日以外必ず、土手のすぐ傍にあったこの公園に行くようになった。

ブランコは四台あって、他にも滑り台、シーソー、鉄棒に砂場と、ここら住宅の子ども達が遊ぶには充分な場所だ。

（とくちゃんは、来てるだろうか？　きのう、あんな事があったから来てないかもしれない）

目を凝らしてブランコの方を見ると、いつものとおりの左端のそこに、太く黒いシルエットがゆっくり揺れていた。

（ああ、とくちゃん…）

私はだまって下を向き、右端のブランコまでそちらを見ないようにしながら、ソロソロと歩いた。そして、彼女とは逆の、夕陽が沈

（やっぱり、行こう！）

玄関で、くつ下を脱ぎながらしばらく迷っていた私は、思い切って臙脂色のサンダルをつっかけ、夕暮れの表へ飛び出した。

みかかった土手に向かって腰をおろした。
いつもの形。
そう、とくちゃんは土手を背にし、住宅に向かって座る。いや、立ち乗りをする。私は反対に、土手の上の空を見て座る。
とくちゃんの年齢は、はっきりしないけれど、十八くらいと聞いた覚えがある。知的障害を持って生まれ、その上アレルギーで鳥肌だったような皮膚をしていた。赤茶色の髪はおかっぱにしていたけれど、後ろ髪は、鳥が巣を作ったようなひどい寝ぐせで固まっている。柿色の瞳をして、いつもゼーゼー音をたてて呼吸をするものだから、しっかり口を結んでいるのを見たことがない。夏も冬も一年中ゴムウェストのスカートをはいて、北風が吹く日などさすがに寒くないのかしらと心配になるほどだ。
でも、とても元気がよく、というより生命力にあふれているという感じが、小柄でもがっしりした体全体にみなぎっている。そして何と言っても声が大きい。張りがある。時に地響きするようなドスをきかせて、心ない罵声を吐いてからかう子供達を、「バッカー！」と怒鳴ることもあった。
いつか私は、ブランコに立ち乗りしているとくちゃんを真正面から見たことがあった。夕日が後光のように降り注ぎ、とくちゃんの髪は金色に染まっている。真直ぐ前を見、仁王立ちしてブランコをこぐ太いものの回りを、スカートの襞がやわらかくふくらんだりと閉じたりする。その威風堂々の立ち姿に、思わず立ち止まり見入ってしまった。
とくちゃんは又、うたを歌う。と言っても、はじめの一節を何十回と繰り返すだけだが、大きい声は、とっぷり日が暮れるまで公園の中に響き渡る。
〝夕焼けこやけで　日が暮れてぇ…〟
〝夕焼けこやけで　日が暮れてぇ…〟
ある日、
〝山のお寺の鐘がなるうー…〟
と私がつづけたら、すかさず、「バッカー！」と叱られた。それからは、つづきは歌わず知らんぷりしていることにした。
やっぱり、私はだまっているとくちゃんがいい。時々そこにいることを忘れるくらいがいい。
それなのに、二人のブランコがすれ違う時、甘酸っぱい汗の匂いがプーンとしてくると、何故だか胸がキュンとなる。そうして、ゆらゆら揺られながら見上げた夕空に、金星がキラリと光ったりしても、涙がでそうな不思議な気分になった。

きのう、いつものようにブランコに乗っていると、六年生くらいの男の子達が四、五人、公園の入口から連れ立って入って来た。近所の子ではない。それに私は五年生だから、すぐに上級生だなと分かった。辺りをキョロキョロ見回しながら、始めは賑やかに滑り台を登ったり降りたり、シーソーに飛び乗ったりしていた。けれどそのうち、私達の方へやって来て、

「おい、乗らせろ！」

と、乱暴に言った。ブランコは、真中の二台が空いていたけれど、乗れずに残った男の子達が、

「おい、お前ら降りろ！」

と私達に向かって言った。私はふり向いてから、いやいやブランコを離れた。けれど、とくちゃんはだまって降りる気配がない。

「なんだよ、こいつ、バカか？」

一人の男の子が言うと、他の子達も

「バカだぜ　気味悪い奴だな！　気が狂っているかもな」

「ほら　降りろ！」

「降りろ！　降りろ！」

他の子達も口々に言い始めた。砂場の近くで、ひやひやしながら成り行きを見ていた私には、注意する勇気は出なかった。本当は怖かったのだ。

中の誰かが、とくちゃんの足元めがけ小石を投げた。

「バッカー！」

例のとくちゃんの大声が響きわたった。

「なんだー？　こいつ！」

もう一人の大柄な男の子が、今度はとくちゃんの乗るブランコの手すりをつかみ、大きくゆさぶり始めた。でもとくちゃんは、がんとして降りようとしない。少し離れた所から別の男の子が又、石を投げた。

「あっ！」

とくちゃんは、左手を手すりにからませ、石が命中したであろう額に手をあて、ムッとした表情でその子を見返した。一筋の赤い血が、指の間から手の甲を伝って流れた。それを見た男の子達はびっくりしたのか、蜘蛛の子を散らすように公園を出ていった。私は恐る恐る近寄り、「とくちゃん　大丈夫？」と、か細い声で聞いた。とくちゃんは、だまってブランコから降り、額を押さえながら泣きもせず、ゆっくり歩いて帰った。

誰も居なくなったうす暗い公園に一人残された私は、自分が情けなく、込み上げてくる熱いものをゴクン、ゴクンと飲み込みながら、

泣きたくなる気持ちをこらえた。
（私は、臆病でずるい子だ）

ブランコを、ゆっくりゆっくりこぎ始めた時、
〝夕焼けこやけで　日が暮れてぇ…〟
いつもより心なしか小さい声だけれど、とくちゃんが歌い出した。
〝夕焼けこやけで　日が暮れてぇ…〟
うす墨色の光の中で、私は何気をよそおいながら、とくちゃんの額を捜した。でも、ブランコは、あっという間にすれ違う。とうとう分からないまま、しっかり日は沈んで辺りは暗くなってしまった。
とくちゃんはうたを止め、ブランコから降りた。と、その時、一瞬生あたたかい風がどこからともなくサァーと吹いて、とくちゃんの前髪をふわりとかき上げた。暗がりの中に、まっ白いバンソウコウが、はっきりと確認できた。

その夜、私は母から、「帰りが遅い、子供が毎日何しているの！」と、こっぴどく叱られた。
それからは、しばらく公園へ行かなくなって、とくちゃんの事は、思い出したり忘れたり、又思い出したり忘れたり、そうこうしているうちに私の頭の中からやがて、とくちゃんは遠くなっていった。

五月のある日、時々いっしょに遊ぶ事があった近所の友達が、本を貸してくれると言うので、学校の帰り寄って行くことになった。八重桜もとうに散って、住宅街のどの家の垣根もびっしり若芽がふいてこんもり黄緑色をしている。庭のつつじの赤紫は、燃えるように鮮やかだし、柿の木ももみじの木も若葉は初夏の光を受けやわらかく輝いている。うっとりながめながら歩いていたら、どうやら私は一本道を間違えてしまったらしい。
（そうだ、みっちゃん家は、もう一つ先の路地を入って行くんだった）
急ぎ足で角の家を曲がろうとした時、奇妙な光景が目に飛び込んできた。
（えっ？　何これ！）
曲がり角のその家の垣根に、葉っぱが一枚もついていない。どの家もみんな黄緑色の垣根なのに、ここだけが裸の枝まるだしでまるで冬の景色だ。いや冬だって葉っぱは無くならない。かろうじて下の方に何枚かのくすんだ葉がついて草が生えているけれど、周囲と余りに違う垣根に、家全体も不思議な雰囲気につつまれていた。私

はめずらしさと少しの怖さも手伝って、じっと見入ってしまった。
すると、玄関の戸がガラガラと音をたてて中から人が出てきた。なんとそれは、とくちゃんだった。急に心臓がドキドキしはじめ、気が付くと私は走っていた。
（とくちゃん家？　どうして？　葉っぱが無いの？　どうして？）
友達の家についた時
「さえちゃん　どうしたの？　顔青いよ」
みっちゃんが心配そうに私の顔をのぞきこんだ。
「角の家、あの、あの、とくちゃんの家でしょう？　垣根にさぁ葉っぱが無かった…」
すると、みっちゃんは落ち着いて言った。
「ああ、あれはね、とくちゃんのお姉さんがみんな取っちゃうの。病気だから仕方がないのよ」
「病気？」
「そう　心の病気って、お母さんが言っていた」
「そう……」
それ以上は聞けなかった。
「上がっていく？」
「ううん、いい、用があるから」
「じゃあ、はい、これ。読み終わったら返してね」
「ありがと…」
「じゃ、さよなら」
「さよなら」
私に元気がなかったせいか、みっちゃんは庭先まで出てきて、「気をつけてね」と見送ってくれた。私は、もう一度とくちゃんの家を見たくなって、みっちゃんがいなくなったのを確かめてから途中で道を戻った。やっぱり、葉のない垣根は何とも異様に寒々しく、さっきと変らず寂し気にそこにあった。帰り道、もう私の頭の中はとくちゃんのお姉さんでいっぱいになった。
（葉っぱをむしるお姉さん…、何だかどこかで聞いたような気もする。えーと、えーと、そうだ！　もしかしたら、お母さんがいつか話していたあの人、あの女の人のことだろうか…？）
遠い遠い記憶、うろ覚えのその人は、母が父に話していたあの人のことだった。その人は、すらりとしなやかな体つきをした色白の美しい人だ。年の頃は、二十歳をとおに過ぎていただろう。いつも外を歩く時、人形らしき物を大切そうに御包みにくるんで抱え、ぼんやりとどこを見ているでもない目をして、かいなの人形に向かい小声で話しかけると言うより、つぶやく。それは、感情の入らない

短い言葉の繰り返しだった。
「そうなのよ…。そうなのよ…。」
でも近所の大人たちは、取り立てて奇異な目でみたりしない。むしろ、やさしく見守っている感じだ。もう何年も、彼女が重い心の病を患っていることを知っていたから。
そうしてその人は、そうそう、葉っぱを集める癖があると言っていた。それも、自分の家の垣根の葉、正木の葉を。むしって、むしって、無くなるまでむしり取るので、垣根は葉のつく間がない。
「一体、その葉っぱをどうするんでしょうね？」
母は、しきりに不思議がっていた。
（あの人は、とくちゃんのお姉さんだったんだ）
私は、自分が見た光景とあの日の母の話しが、しっかり重なっていくのを実感していた。

日曜日の朝、庭の草むしりをしていた母が、うれしそうに声をあげた。
「さえちゃん、来てごらんなさい。　バラが蕾をつけはじめたわ！　今年は沢山咲くわね」
庭の垣根のそばに小さなピンクのつるバラがあった。私が一年生の時、友達の家の庭に咲いていたバラを「きれい！　きれい！」としきりにほめるので、おばさんがハサミを持ってきて、パチン、パチンと何本か切って持たせてくださった。それを母が「可愛いいわね。野バラだからきっと根付くでしょう」と、庭のはじに植え付けてくれたものだ。
母の言ったことは当たって、バラの小枝は頂いた総てが根を張り、毎年細い枝が陽を捜しながら成長していった。そうして三年生の夏には、待望のピンクの可愛い花をつけたのだ。私がうれしがり、《わたしのバラ》と言いながら虫を気にしたり、頻繁に水やりをしていると、母はきまって言った。
「そんなに構わなくても大丈夫！　野バラは強から」
とくちゃんの家を見たことは、母に言わなかった。お姉さんのことを確かめることもしなかった。理由は特になかったけれど、自分の心の中にしまっておきたかったような気がする。子どもなりに、人の噂をするのは軽薄なことに思えたのだろう。そのかわりとくちゃんのお姉さんは、水が染み込んでくるように私の中で忘れられない人になっていった。

それから何日たっただろうか。梅雨の季節が始まり雨の多い日が

つづいたある日、珍しく国語の宿題に詩が出題された。ノートを開きエンピツをにぎると私は一編の詩を書き始めた。

《わたしのバラ》

雨がやんだら
《私のバラ》を植えに行きます
あの垣根の根もとに

太陽が出れば
《私のバラ》は根をおろし
新しい枝をのばすでしょう

そうして　春がめぐるたび
《わたしのバラ》は
たくさんのピンクの花をつけるでしょう

書きながら、私は自分の体が熱くなっていくのを感じていた。（雨がやんだら《わたしのバラ》を植えに行きます）それは、私の心の中に湧き上がた決意のようなものだった。

次の日、願ったとおり雨は止んだ。私は学校から走って帰ると、まだやわらかいバラの枝を何本かハサミで切り、割り箸といっしょに紙袋に入れ外に出た。心臓がとび出してきそうにドキドキするので口を真一文字に結んで、誰とも目を合わせないよう下を向いて歩いた。

目的の場所に着くと、人の気配のないことを確かめ、すばやく屈み込み袋の中の割り箸を垣根の根もと近くに差し込んだ。雨上がりの土はやわらかく、箸を抜くと細い穴ができた。そこに、袋の中から取り出したバラの枝を入れ指でぎゅっと土を寄せた。人の来ないのをもう一度確かめ、また一枝、もう一枝、そして最後の一枝と四本のバラの枝を夢中で植えつけ立ち上がった時は、足がガクガクして目が回りそうだった。帰りは後を振り向かず知らんぷりして歩き、途中からは一目散に走った。家に着いた時は全身が汗でびっしょりで、手元を見ると指先に赤い血が滲んでいた。

それでも、梅雨が明けジリジリと暑い夏の頃になると、妙な私の緊張感はすっかりやわらいで、その分毎日が楽しい気分で満たされていくのだった。一人でいると自然とうたが出てくる。勿論、歌う

のは「野ばら」だ。
〝わらべは　みーたーり　野中の　ばーら〟
時々調子にのると〝ばーら、らららららーあ〟と、スキップしたりもした。ブランコに揺られる時も口ずさんだ。とくちゃんが「夕焼けこやけ」を歌い出せば、私も負けじと大きい声で「野ばら」を歌う。
　ある日、帰り際にブランコから降り、とくちゃんの前で歌いながらスキップして見せた。すると、最初は無関心そうだったとくちゃんが、こちらをじっと見ているではないか。それだけではない、ブランコから降りて来て、足を交代交代に高く上げ、トントンと飛びはね始めたのだ。
（まねしているの？　とくちゃん）
　私は興奮して、大きく分かりやすいフォームのスキップをこれでもかと続けた。
（とくちゃん、こうだよ、分かる？）
〝ばーらっらららら、ららら〟
　とくちゃんは、ぜーぜー咽をならしながら賢明に私についてくる。
私は思わずふり向いて、
「そう！　とくちゃん、じょうず！」と、拍手した。とくちゃんは、真っ赤な顔をして初めて嬉しそうに笑った。何故だか私は涙が出てしょうがなかった。
　次の日も、次の日も私達はスキップした。
　そのうち欲を出した私は、（よし！　今度は、ツーステップをやってみよう！）と思い、シューベルトの「野ばら」からウェルナーの「野ばら」に曲調を変更して練習した。しかし、これはうまくいかなかった…。

　悲しみは、そう、いつも不意をつくように、突然やってくるものだ。
　その年の暮れも押し迫った凍りつくような寒い日だった。とくちゃんのお姉さんが行方不明になった。三日も家に帰らず、ご両親は気が狂いそうに捜しまわった。警察も出動し、ご近所の心ある人たちもあちこちを訪ねまわった。けれど皆目行方は分からず一週間がたとうとしていた時、変わり果てた姿で発見されたのだ。
　土手の川原につづく坂道に洞窟のような穴があった。まわりは枯れ草でおおわれ、誰もそこにそんなものがあることを知らなかった。その中に、お姉さんは人形をかかえ座って冷たくなっていた。中には、暖をとろうとしたのだろうか、とても一度で運びきることはで

きないと思えるほどの垣根の葉っぱが一面に敷きつめられていた。
お姉さんは、小さい頃から心臓の疾患を持っていて、死因はそれだろうということだった。
淋しく、切ないお別れが終わった晩、母は、気の毒でならないと泣き、父は「かわいそうになぁ」と涙をぬぐっていた。私は、布団の中で、とくちゃんを思って泣いた。本当に、あっけない出来事だった。

あれから、何年たったのだろう。春が来るたび、とくちゃんの家の垣根は、こんもり黄緑色に輝くようになった。ピンクの野バラは、庭の中に枝を伸ばし、甘い香りの小さな花を数え切れないほど咲かせた。
日が暮れた公園の真上に金星が輝く頃、時々、私はブランコに乗りに行く。そうして、ゆらゆらと揺られながら、鼻うたを歌う。
〝わらべは見たり　野中のばら〟
とくちゃんは、もう家に帰りました。

（了）

「印旛文学の会」について

・本会は、「印旛文学の会」と称し、文芸「草の丘」を年に2回発行する等の活動を行う。
・文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行するとともに、ウェブサイトに全文を発表する。
・会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心がある人で、詩や小説、随筆等を創作し発表する人とする。
・会員は、年会費三千円を負担する。年会費では対応できない費用が発生した場合には、会員はその費用を分担するものとする。
・会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、掲載については編集会議でその可否を検討する。
・その他、会の運営に関する重要事項の変更については、合評会等の場で、会員に諮って決するものとする。

アプとズコ(Appu & Zukko)　第二回

香取　淳

4

アプとズコが次に洞窟を訪れたのは、一週間後のことです。その朝、二人はペクールが作ってくれた弁当をウエストポーチに入れてホサピ小屋を出ました。服装は紫のシャツにショートパンツであることは申すまでもありません。空は青く晴れ渡り、頬や首筋を撫ぜる秋風が爽やかです。二人は、イカタック星人とその家畜であるホサピたちの目があるところでは意識してゆっくり走りました。アプは首をぐらぐら回しながら走るフォーム、ズコは体を左右に大きく揺らすフォームも忘れずに励行しています。

十分ほどで家並みが途切れ、見渡す限り草原が続く道に出ました。そこで二人はギアをトップにチェンジして、ヒゲ爺(じじい)のいる洞窟を目指します。時折、イカタック星人の車が近付いてきます。その走行音や気配を感じると、二人は走るペースを徐々に落として、車がすぐ脇を通るときにはぎこちないフォームを誇張して走りました。このようにトップスピードで走ったり、ゆっくり走ったりすることは、ホサピレースで勝ったり負けたりを演じるときに役立ちそうです。

「ズコ、私、いいことを思いついたわ」

アプが隣のズコに話し掛けます。

「なに？」
ズコが顔を横に向けました。
「家に帰ったら、パーリオさまにどんな練習をしてきたかって、訊かれるでしょ」
「うん、そしたら僕は、走った時間とおおよその距離…かな」
「そう、そう。それに加えて今日はね、速く走ったり、遅く走ったり、それを目立たないようにやる練習をしたって話そうよ」
「実戦向けの訓練をしてきた、と言うわけ？」
「そう。パーリオ様やペクール様はきっと喜ぶわよ」
「フーン、アプは凄いことを思いつくね」
「だって怪しいと思われたら危ないもの。パーリオ様たちをいつも安心させておかなければ」
ズコは、自分を大切にしてくれるパーリオ夫妻に嘘をつくことにためらいを感じた。出来ることなら本当のことを包み隠さず話したいという気がする。しかし、真実を話したら二度とヒゲ爺に会うチャンスはなくなってしまうし、自分たちの命も危うくなりそうである。それを考えると気持ちが沈んで、軽快に走っていた体までも重たく感じられた。
「どうかしたの、ズコ。急に黙り込んで」
「いや、何でもない。ちょっと息が苦しくて」
「ズコは意外と持久力がないのね。私は平気よ」
「アプは立派、凄いです。それよりこの道路から早く出ようよ。車が怖いから」
「そうね、乱暴なドライバーが多いわね」
「僕らエンタテイメントホサピは賠償金が高くつくから別らしいけど、ほかのホサピは轢(ひ)いたって平気なんだって、イカタックの奴らは」
そう言いながらズコは思い切りジャンプして、ガードレールを飛び越えます。ズコも後に続いて、道路脇の草原に降り立ちました。丈が二人の腰あたりまである青草を掻き分けて進むと、細長い広がりに出ました。芝草のところどころにアスファルトが剝き出したところは、かつて人間が作った道路です。三百年の歳月は、車両が頻繁に往来した道路を、草原の一部に塗り変えてしまいました。ただ、地表に分厚く敷き詰められたアスファルトやコンクリートで根が張れないために、丈の高い草や樹木は生えていないのです。
二人の前に、こんもりとした山が幾つも迫ってきました。それらの間を縫うように続く古道をしばらく進むと、深い谷が見えてきました。

「ワオーッ、谷川だ！」
ズコが歓声をあげました。アプも万歳をする格好で清流を目指して駆けて行きます。二人は何の躊躇(ためら)いもなく冷たい流れに足を踏み入れ、水飛沫(しぶき)を上げながら上流に向かいました。途中にある小さな滝も、濡れた岩場を素早くよじ登ります。そして地底湖の水が流れ出している洞窟の入口に着きました。
「僕から入るよ！」
身を屈めて洞窟に入ろうとするズコを、アプが制します。
「待って！　一応、安全を確かめるから」
アプは周囲の雑木林と、梢の間から見える青い空を見上げました。
「心配ないよ、アプ。イカタックの奴らは地球の重力に弱いからさ、こんな山奥にまで見張りには来ないって」
「でも、空からの偵察だってあり得るわよ」
「本当にアプは用心深いな」
「そう、何事にも気をつけなくてはね」
安全の確認が済むと、アプはズコの尻を押すようにして洞窟の中に入りました。鍾乳石の壁が暗闇に白く浮き上がり、つらら石からポタポタ落ちる水滴が頭や肩を濡らします。二人の足もとは踝まで地底湖から流れ出す水に浸かっています。手探りで十メートルほど進むと、地底湖のほとりに着きました。
「アブとズコ、いらっしゃい。よく来た、よく来たな」
天井からヒゲ爺の声が流れてきました。ここに来るのは二度目ですが、それでも不安に駆られていた二人はホッとしました。
「ヒゲ爺には僕たちが見えるの？」
ズコが暗闇に向かって尋ねます。
「ああ、赤外線カメラといってな、暗闇でもよく見えるカメラが設置してあるのだよ」
「そうか、最初に来たときもそれで私たちを見ていたのね」
アプも感心して言いました。
「いま、迎えのボートを出すからな、少し待っていなさい」
真っ暗闇の地底湖の先に、小さな灯りが現れました。その灯りは見る見るうちに大きさを増して、こちらの岸に近づいてきます。最初のときと同じ四人乗りのボートですが、今回は操縦席に誰かいるようです。すぐ近くまでボートが来ると、操縦席に座っているのはロボットであることが分かりました。そのロボットは、ボートを桟橋にピタリと付けて、アブとズコに話し掛けます。
「いらっしゃいませ、アプとズコ。お迎えに来ました」
「この間のロボットだわ！　そうよね、ロボットさん」

アプが叫ぶように訊きました。
「そうです、一週間前にお会いしました」
「お迎え、有難う。ボートに乗ってもいいかしら？」
「いえ、ボートを固定しないと危険です。ロープで結んでください」
その声で、ズコが桟橋の両端にあるロープを引き上げて、ボートの前後を結わえました。
「アプ、もう安心だから」
アプに続いて、ボートに乗り込んだズコが、二本のロープを外して大声をあげます。
「ロボット君、出発進行！」
「かしこまりました。発進します」
スクリューが回り始め、ボートは桟橋の岩を離れました。暗い地底湖の水面をボートのヘッドライトが照らし出します。水深はどれ位あるのでしょうか、薄青い水がどこまでも澄みきっています。それ以外は真っ暗闇で、思わず地底湖の底に引き込まれそうです。後の席に並んで掛けたアプとズコは、いつの間にか互いに手を強く握り合っていました。
「間もなく到着です。降りる準備を願います」
ロボットが言い終わると間もなく地底湖の対岸に着きました。アプとズコは、ボートから降りてヒゲ爺のいる部屋に向かいます。
「よく来たね、待っていたよ」
灯りが漏れている部屋に入ると、ヒゲ爺が歓迎の声をあげました。
「お名前は、確かアプとズコ、でしたわね。先日はご挨拶もできずに失礼しました」
ヒゲ爺の隣にいた白髪のお婆さんが、初めて口を開きました。
「はい、私はアプです。今日のお婆さんはお元気そうで良かった」
「僕は、ズコ。お会いできて嬉しいです」
二人も、皺に覆われた老婆の顔を真っ直ぐに見て挨拶を返します。
「うちの婆さんはね、君たちが来てくれたお陰で、失っていた言葉を取り戻したのだよ。これはもう凄いことだ」
ヒゲ爺はそう言いながらアプとズコ、さらに老婆の顔を代わる代わる見つめます。
「私はねえ、最後に残った親しい友が数年前に亡くなったときから誰とも口を利かなくなったの。それ以来、言葉をすべて失ってしまい、夫とも話すことが出来なくなったのよ」
白髪の老婆が、穏やかな口調でアプとズコに話します。
「そんなことってありなの！　私たちが来たというだけで？」
目を見張って驚く二人にヒゲ爺が優しく言いました。

「人間というものはね、一人では生きられない動物なのだよ。先週、君たちが突然ここにやってきた。それを見た婆さんは、君たちとお話しがしたかった。話したい、話したい、という気持ちが、婆さんに言葉をよみがえらせた」
「えーッ、僕たちがここにいるだけで、お婆さんは元気を取り戻した、というわけ？」
「その通り。ズコやアプが生きていること、それがとても貴重で素晴らしいことなの」
「へーッ、そんなこと、聞くのは初めて」
ズコが感心して言いました。
「この世の中で一番大切なことはね、人が生きているということ。何にもまして、生きていることが大切なのよ」
白髪のお婆さんが背筋をぴんと伸ばして、張りのある声で言いました。アプとズコが最初に会ったときからは想像もできないほど表情が豊かになり、十歳以上も若返った感じです。
「婆さんがこんな風に話すのは何年振りのことかねぇ、ワシはとっても嬉しいよ」
そう言って目を細めるヒゲ爺を睨みつけ、お婆さんがきつい口調で言いました。
「あなた、私を〝婆さん〟って呼ぶのは止めて！」
「そうだね。ごめん、ごめん」
「私の名前は天原千佳（あまはらちか）です。婆さんではありませんから」
「そうそう、そうです、そうでした。地下で生まれて地下に育ち、地下で暮らす千佳さんなのに、千佳と呼ぶのを忘れてました」
突然、ヒゲ爺が駄洒落（だじゃれ）を言って怒る妻を茶化しました。アプとズコは、思わず吹き出しそうになりましたが懸命に堪えます。
「ヒゲ爺だって、ジーエイトではないでしょう、本当のお名前は？」
アプが真顔に戻って訊きました。
「ワシの名か…、ワシの名は天原源蔵（あまはらげんぞう）というのだがね、もう何年もひとから名前を呼ばれたこともないから」
ヒゲ爺は目を伏せて、ポツリと答えました。
「いいえ、心配しないで。これからは私がね、源蔵さん、源蔵さんって、毎日お呼びしますから」
隣に座った千佳婆さんが、励ますように言いました。
「僕も源蔵爺さんって呼びますよ。アプもそうしようよ」
「ええ、源蔵爺さん。それと千佳婆さんも」
四人は、親しみを込めて互いの名を呼び合います。その様子は、祖父母とその孫たちが集って、団らんする家族のように見えました。

「ところで君たち、ここに来たらいっぱい勉強をしないといかんぞ」
源蔵爺さんが、それまでとは違う口調で切り出しました。
「ヒェーッ、勉強ですかぁ。それは、次からということに…」
ズコが、その場から逃げだすポーズをとります。
「いや、勉強と云っても、そんなに堅いものではないから」
そう言うと、源蔵爺さんは脇のリモコンを取り上げて、慣れた手つきで操作します。すぐに奥から二足歩行のロボットが、空の車椅子を押して現れました。そのロボットの助けを借りて、源蔵爺さんが車椅子に座ります。
「君たちに見せたいものがあるから、ついておいで」
源蔵爺さんはそう言うと、車椅子の背をロボットに押させて、地底湖の畔（ほとり）につながる通路に入っていきました。車椅子の背もたれの左右にはヘッドライトが付いています。その角（つの）のようなライトに照らされて、ごつごつした岩壁が前方に続いています。アプとズコは源蔵爺さんの後について、地底湖の畔にある広がりに出ました。
「最初にスクールを案内しよう。スクールとはな、君たちがこれから勉強をするところじゃ」
源蔵爺さんは、住み家（か）にしている洞窟の隣に黒々と口を開けている洞窟に入って行きます。入り口は、車椅子に乗った源蔵爺さんが、楽に入れる広さと高さです。その洞窟は、数メートル先で行き止まりになっていました。しかし、源蔵爺さんが車椅子に付いているボタンを操作すると、岩の扉が音もなく開きました。
「ウワーッ、凄い！」
ズコが大声をあげました。そこは明るい球形のドームで、岩の壁には大きなディスプレイが等間隔に嵌め込まれています。ぐるりと八つ、円形に並んだディスプレイの前には大きなキーボードと、黒革のシートが設置されています。
「これは何？」
ズコが黒革のシートに近づきながら尋ねました。
「そのシートに掛けてごらん。いろいろなことが分かるから」
源蔵爺さんはそう言って、ズコをシートに座らせます。黒いシートはゆっくり動いて、ズコの体に合った高さや背もたれの角度で止まりました。源蔵爺さんがズコの前に手を伸ばして、キーボードのボタンを幾つか叩きます。すると軽快な音楽と共に、ディスプレイには『言葉の学習』というタイトルが広がりました。そのタイトルが消えると、画面いっぱいに『あ』というひらがなが、音声とともに示されます。一旦文字が消えて、再び『あ』の文字が書き順を追って描かれていきます。

「フーン、これが『あ』という字か」
ズコが小さく頷きながら言いました。脇で見ていたアプが「私も覚えちゃった」と大声をあげます。その二人を笑顔で見ながら源蔵爺さんが話しかけます。
「この装置を使って、先ず国語から勉強を始めよう。文字の読み書きができるようになったら、その次には歴史や文学、次いで自然科学という順かな」
「楽しい歌やお絵かきも？」
アプが、源蔵爺さんに尋ねます。
「そう、音楽や美術、工作だって勉強できるよ。ただ、そのためには文字の読み書きができるといいな。文字を読んだり書いたりすることができれば、何の科目だって自由に学べるようになるから」
「フーン、自分で勉強することができるようになるんだ」
アプとズコはそう言って、目を輝かせました。
「この部屋ではな、太陽や月、星のことも勉強できるよ」
源蔵爺さんは部屋の照明を落として、天井のプラネタリウムのスイッチを入れました。真っ暗になった部屋の丸い天井に、無数の星が浮き上がってきました。
「これは今どきの夜空に見える星だよ。こんなにある星の一つ一つにも、みな名前が付いている。興味があったら、そのうちに勉強したらいいな」
「へー、そんなことまで勉強できるんだ」
天井を見上げながら、アプとズコは感心しています。源蔵爺さんは部屋の明かりをつけて、二人に言いました。
「今度、君たちが来たときにはね、ここでしっかり勉強をしてもらうことになるよ。さぁ、次は農園を案内しよう」
そう言って、源蔵爺さんは車椅子の向きを変えます。円い岩壁に、パクリと口を開けた洞窟をくぐり抜けて、一行は地底湖の畔の広がりまで戻ってきました。源蔵爺さんは、その広がりの向かい側にある洞窟に入って行きます。その洞窟も、数メートル先で行き止まりですが、車椅子のボタン操作で扉が左右に開きました。
「ウァッ、眩(まぶ)しい！」
アプとズコは思わず叫びました。暗い洞窟に慣れた目が、痛いほどに眩しい明るさです。その明るさは、天井に取り付けられた無数の照明灯が放つ光でした。光の下にはプレートが長く伸びて、緑の葉が隙間もなく茂っています。プレートには屋根のような傾斜がついていて、天辺に張り巡らされたパイプの小孔から水が流れ出ていました。

「こんな地下でも、植物が育つの？」
アプが感嘆して訊きました。
「植物はね、光と水と適度な温度、それに少しの栄養分があればいくらでも育つ。このプレートは丈の短いカイワレ大根、隣の青い葉は小松菜だ。その先にはキャベツ、奥には玉ねぎやトマトもあるよ」
源蔵爺さんは得意気に話します。
「別の農園では稲や小麦も栽培している。そのような作物に限らず、大きな水槽では鯉やフナ、マスも育てているよ。最初はこの洞窟に棲みついていた山椒魚（さんしょうお）を養殖することから始まったのだが、その後に魚の種類を増やしていったんだね」
「フーン、凄いなぁ。洞窟の中で食べ物が自由にできるんだ。でもさあ、どうして照明がついたり、リモコンでいろいろなものが動いたりするの？」
ズコが首を傾げて訊きました。
「良い質問だね、ズコ。それがどうしてか、これからお見せしよう」
源蔵爺さんは活き活きとした表情で農園を出ると、地底湖とは逆方向に車椅子を進めました。車椅子を押すロボットは、源蔵爺さんの思いのままに動くようで、大きな段差に差し掛ると車椅子ごと源蔵爺さんを持ち上げたり、段差を降ろしたりしています。そのロボットに助けられた源蔵爺さんの後について、二人は洞窟の奥深くへと進んで行きます。
巨大なホールのように広かった洞窟の岩壁や天井がだんだん近くに迫ってきて、高さと幅が数メートルほどになりました。洞窟は少し登りになって、水の流れ落ちる音が聞こえてきます。大きく迫り出した岩を取り巻くように登っていくと、水音は一段と激しさを増してきます。ロボットに車椅子ごと抱きかかえられた源蔵爺さんの後を追って、岩の上まで登り詰めたとき、眼下に小さな滝が現れました。アプたちの背丈の二倍ほどの高さから、水量豊かな水が滝壺に落ちています。
「この滝を、よく見てごらん」
源蔵爺さんは、車椅子に取り付けられたライトを操作して、小さな滝を照らし出します。その水柱の中ほどには、水車が勢いよく廻っていて、飛沫（しぶき）を激しく撥ね上げていました。そして、脇の岩の窪みに、丸みを帯びた緑色のものが設置されています。
「源蔵爺さん、水車の横にある緑色のものは？」
「発電機だよ。あの発電機で電気を作っているわけさ」
「へーッ、それで洞窟の中を明るくしているんだ」
「その通り。でも、これ一つでは足りないから」

源蔵爺さんはそう言いながら滝壺に架かった橋を渡り、さらに奥へと進みました。洞窟は緩やかな登りになって、通路の脇には滝への水が流れています。その流れには、数え切れないほど多くの小さい水車が設置されていたのです。ただ、先ほどの滝とは違って、水車が回る速度はゆっくりしたものです。

「こんなにゆっくりでは、電気は幾らもできないでしょう」

ズコが呆れ顔を隠さずに言いました。

「そう、その通り。ズコはいいところに目がいくね。この緩やかな流れでは僅かな発電しかできないが、小さなモーターだったら十分に廻せる。ここにある装置は、いつも小型モーターでバネを巻いてエネルギーを蓄積しているのだよ。一つのバネを巻き終えたら次のバネ、さらに次のバネへと自動的に切り替わる仕組みだ」

源蔵爺さんは、足元の装置にライトを当てながら話しを続けます。

「電気が要るときにはね、目一杯巻いたバネの力で発電をする。たとえばファームで作物に強い光を当てるときには数十個のバネを一斉に巻き戻す」

「フーン、必要なときには必要なだけ、電気を取り出して使えるというわけだね」

「そうだよ、ズコ。このような発電装置が洞窟内にはいっぱい設置してある。でも今は、ワシと家内だけになってしまったから、大半の装置は運転を止めているけどね」

一瞬、寂しげな表情をした源蔵爺さんは、車椅子の方向をクルリと変えました。それにつれて車椅子のライトが洞窟の下方を照らし出します。斜面を降りて行く源蔵爺さんは、車椅子ごとロボットに抱きかかえられているかのように見えました。アプとズコも源蔵爺さんの後について、ホールのような広がりまで戻ってきました。

「この通路はな、体育館や憩いの部屋に続いているのだよ。今日はもう中には入らないが、運動や筋トレ、休息やマッサージをしたいときには何時でも入れるから」

源蔵爺さんは、スクールの手前にある洞窟を指さして言いました。そして、スクールや住み家に続く洞窟の前を通り過ぎて、地底湖の水際に大きく口を開けた洞窟の前まで来ました。

「この洞窟には、絶対に入ってはいけないよ。奥はゴミの廃棄場だが、放射線で汚染された物質も沢山捨てられているから」

源蔵爺さんは、厳しい表情でそう言いました。

「放射線で汚染、とはどういうことですか？」

アプとズコが、殆ど同時に訊きました。

「いまから三百年も前の話だが、私たち人間は核戦争をしてしまっ

た。原水爆という恐ろしい兵器は、猛烈な熱線と爆風で瞬時に都市を破壊し、そこに住む人も動物も死に追いやる。さらに放射線を出す不安定な元素をいっぱい撒き散らすから、熱線や爆風に晒されなくても、不安定な元素が出す放射線からは逃れられない」

虚ろな表情で言う源蔵爺さんに、アプが尋ねました。

「話すことも辛いほど、ひどい戦争だったのですね」

「そう、地球上の主要都市はすべて破壊され、その周辺にも放射線を出す物質が蔓延して、人も動物も次々に死んでいった。その中で安全に生き残る方法は地下に潜ること。地下深くには放射線が射し込んで来ないから」

「そこで、源蔵爺さんの先祖はこの洞窟に逃げ込んだわけ？」

「そう。地上から逃げ込んだときに着ていた衣服や靴、持ち物など、放射線を出す物質が付着したものはすべて、この洞窟の奥に封じ込めたのだ。その作業はロボットを使ったが、その後で持ち込まれたものも、みなロボットが運び込むことになっている」

「その後で、と言いましたね。ここに避難後も外に出ることがあったのですか？」

「ああ、勇敢な若者が防護服を身につけて、建設資材や電気器具などを調達するために。それも数年の間で、イカタック星人がやってきてからは外に出られなくなった」

「どうしてなの？」

「彼等は人間を見つけると、誰でも見境なく殺した。そうするうちに生き残った人間たちは、抵抗することをやめて、自らイカタックの奴隷になる道を選んだ。しかし、時折反抗をしたり反乱を起こしたりしたので、人間は家畜に変えられてしまったのだ」

「フーン、それがホサピというわけですね」

「そう、地球全体を巻き込む核戦争からわずか二、三十年後に、人類は絶滅した、ということになったわけだ」

「でも、イカタック星人はどうして地上で生きられたの？」

「ウム、詳しいことはよく分からないが、彼等が住む星は彗星との衝突で消滅したらしい。消滅する前に宇宙に飛び出したイカタック星人たちは、宇宙で生きる術を身に着けていたようだね。宇宙は放射線で満ち溢れているから」

「あのタルの中に入って凌いだのかな？」

ズコが何気なく言いました。

「タルだって、奴らはタルに入っているのかい？」

「そうだよ、源蔵爺は知らなかったの」

「ワシは彼らに会ったことはない。もしあったら、殺されているよ」

「そうだね。彼等は体が重たくて仕方ないからさ、キャスター付きのタルにいつも入って暮らしているんだよ」
「分かってきた、奴らはきっとカプセルに入って生き延びたのだ。放射線を完全にブロックする密閉されたタルのようなものの中にいれば生きられる筈だ」
「でも、彼等はタルから顔や手を出しているよ」
「ああ、今はね。放射線は時間とともに弱くなるから、もう心配がないのだよ」
「そうかぁ、私たちもそれで野山を自由に走り回れるわけね」
「そう。だけどこの水際の洞窟にだけは入ってはだめだ」
「分かりました。僕たちはここには入りません」
「ああ、絶対に入らないでおくれ」
源蔵爺さんは二人に念を押して、住み家に向かいました。一行は狭い洞窟を左右に二、三度曲がって、千佳婆さんが待つ部屋に戻りました。そこには小さな座卓が置かれ、手作りのお菓子やジュースが載せてあります。
「お帰りなさい、アプとズコ。洞窟の中はどうでしたか？」
千佳婆さんが、飲み物やお菓子を勧めながら訊きました。
「ウン、いろいろなものがあってとても面白かった」
ズコがジュースを一口飲んで答えます。
「農園の青々とした野菜にはびっくりしたわ、新鮮でおいしい野菜がいつでも食べられそうね」
アプもお菓子を頬張りながら言いました。
「そうなの、ここには新鮮な野菜やお魚もあって生活に不自由はないわ。ただ足りないのは夢と希望よ。洞窟から抜け出して、のびのびと自由に生きること。沢山の同胞と子供や孫たちがいて、未来永劫（えいごう）に人間の世の中が続いてゆくこと。その夢と希望がないのよ」
千佳婆さんは黒々とした岩の天井を仰いで、嘆かわしい表情を隠そうともしません。
「千佳さんや、そう嘆きなさんな。もしかして、ここにいるアプとズコがね、人類の救世主になることだってあるかも知れないよ。もしそうなったとしたら、アプとズコがワシらの夢であり、希望ということになるじゃないか」
「本当にそうなるの。この可愛らしい男の子と女の子が、人間の世界を取り戻してくれるというの？」
「千佳さんや、幼い二人にそんなにプレッシャーをかけてはいかんよ。これからいろいろなことを勉強したり知恵を絞ったりして、チャンスを待つのだよ。それは恐らく簡単なことではないだろうが、

イカタックの奴らにも必ず弱点がある、きっとあるから」
源蔵爺さんは、三人の顔をしっかり見詰めて、力を込めてそう言いました。アプとズコは、源蔵爺さんの言葉に、コクリと頷くほかはありませんでした。

5

秋も深まり、落葉樹が赤や黄色に染まり始めました。アプとズコは月に二、三度のペースでホサピレースに出ていましたが、着順はいつも中ぐらいでした。飼い主のパーリオに命じられた『ホサピを装ったフォーム』も、いまではすっかり身についています。レースで実際に体を左右に大きく振って走る、あるいは首をぐらぐら回して走ってみると、スピードはあまり出ません。ですから、アプもズコもレースの結果は気に掛けずに走っていれば、ゴールでは中ぐらいの着順になっていたのです。
ある朝、ホサピ舎にパーリオがやってきました。そして、トレーニングに出かけようとしていた二人に、声を掛けました。
「来週のモミジ杯はズコ、お前だよ。今シーズン最後のビッグレースだから、存分に走って必ず優勝すること。アプは途中までレースを引っ張ってもいいが、最後はスタミナ切れを装って後ろにつけるように。同じホサピ舎で上位を独占するのはまずいからな」
「ハイ、わかりました」
アプとズコが素直に答えました。
「それから朝晩は冷え込んできたから、体を冷やさないように。ジャージやウインドブレーカーは忘れずに持っていくんだよ、分かったな」
「ハイ、パーリオ様」
二人が声をそろえて返事をすると、パーリオは機嫌よく妻のペクールが作った弁当を手渡してくれました。アプとズコは早速、紫のジャージの上下を着て街なかに走りだします。母屋では、パーリオ夫妻が二人の様子を観察しているに違いありません。『飼い主から言われたことは忠実に守ること』、それが極めて重要であることを、二人ともよく知っていたので、すぐにジャージを身に着けたのです。
間もなく汗ばんできた二人は、ジャージを脱いで通い慣れた古道を洞窟に急ぎます。レースとそのための移動日以外は必ずといってよいほど洞窟に出入りしている二人は、いろいろなことを勉強してきました。いまでは平仮名や片仮名、漢字も当用漢字までは読み書

きすることができるようになっています。
「アプとズコ、いらっしゃい。外はだいぶ寒くなってきただろう」
源蔵爺さんと千佳婆さんが、地底湖の桟橋まで来て、二人を出迎えます。千佳婆さんは車椅子ですが、源蔵爺さんは立っています。
「あれ、車椅子は？」
「車椅子などもう要らないよ。この足で歩けるようになったからな」
源蔵爺さんは、両手で膝をポンポン叩きながら笑っています。
「それは良かった。よかったね、源蔵爺さん！」
アプとズコは、源蔵爺さんを祝福しながらボートを降りました。
「私も歩く訓練を始めているから、もうすぐよ」
車椅子の千佳婆さんも、笑顔で二人に言いました。
「源蔵爺さん、千佳婆さん、外は紅葉がとってもきれいですよ。ほら、これはお土産の楓（かえで）」
アプが、洞窟に入るとき手折ってきた真っ赤なモミジの枝を千佳婆さんに手渡します。
「まあ、何てきれでしょう。外にはこのようなモミジがいっぱい？」
「そうよ。松や樅（もみ）の深い緑に楓や楢（なら）の赤や黄色が混じり合って、とてもきれいなの」
アプは、スクールで樹木の種類まで勉強しているので、表現力が豊かになってきました。千佳婆さんは、楓の枝を大切に抱えて、住み家の洞窟に戻っていきます。車椅子の千佳婆さんを見送った二人は、源蔵爺さんと共にスクールに向かいました。
「今日は歴史だ、人類の歴史について勉強しよう」
そう言いながら源蔵爺さんが学習装置のスイッチを入れました。アプとズコはシートに座って、ディスプレイの映像を食い入るように見詰めています。
そこには二足歩行の原人が、洞窟の前に火を焚（た）いて、猛獣などの外敵を防ぐ光景が映し出されます。画面の中で、原人や旧人のネアンデルタール人たちは、道具として石器を作り、それを用いて狩りをしたり、大きな獲物を捌（さば）いたりしています。さらに、木の実の採集や海辺で貝を採る生活を経て、農耕により食物を自ら作るようになってきます。そのような原人、旧人を経て進化したのが、新人のホモサピエンスであることが分かりやすく解説されていきます。
ディスプレイの立体画面はリアルで、石器時代から中世までの人類の歴史を速いテンポで映し出します。アプとズコは、身を乗り出して学習画面に溶け込み、時代の大きな変わり目に挿入された『振り返り』では、システムから発せられる質問に、大きな声で答えていました。

休憩を挟んで、二時間近い学習プログラムが終わりに近づいてきました。途中で席を外していた源蔵爺さんが、スクールに戻ってきました。そして、プログラム終了のテロップがディスプレイに流れると、二人に訊きました。

「アプとズコ、今日の学習はどうだったかな？」

「とても面白かったけど、地球の支配者が人間だったなんて、いまからは想像もできないよ」

ズコが、疲れた目を擦（こす）りながら言います。

「文明が進むにつれて戦争がいっぱい起こったけど、戦場では馬がよく使われているわね。いまの地球では、イカタック星人が人間で、馬の役割はホサピがしているみたい」

アプも、夢から醒めきれないような表情で言います。二人の感想を聞いた源蔵爺さんが補足するように続けました。

「三〇〇年と少し前までは人類がこの地球の支配者であった。それは確かなことだ。しかし、今はでアプが言うように、人間は馬と同じ家畜になり下がってしまった。だけど、この地球はもともと人類のものであって、宇宙からの侵略者のものではない。そのことを、二人とも、しっかり頭に入れておこうね」

「現実とはちょっと…。でも、ハイ、そのように覚えます」

ズコは、俄（にわ）かには納得しかねる表情で答えました。

「もう一つ、大切なポイントがある。それはいま学習したように、かつて人類が地球の支配者になれたのは、〝火を使うこと〟を覚えたためだ。人間は火を使って猛獣などの外敵から身を守り、マンモスのような大きな動物でも、火で追い詰めて狩りをした。その火に加えて道具を作り出し、集団で狩りをすることで地上に住む動物の頂点に立つことになったというわけだ」

源蔵爺さんは、力を込めてプログラム学習を振り返ります。その言葉にアプが質問しました。

「火ですって？　それが何故、ポイントになるの？」

「アプ、今日の学習は中世までの歴史だったね。だから、これからになるが、次の近代になると火薬やダイナマイトが発明される。そうなると戦争で死んだり傷ついたりする人間の数は、以前とは比較にならないほど増えてくる。火薬やダイナマイトも、急激な燃焼であるから火の延長線上にあると言えるな。人類は最初に火を手に入れて地上の覇者（はしゃ）になり、やがて次元は違うが〝核分裂〟という新たな火で滅びることになる。今日はその端緒となった〝人間が火を使うことを覚えた〟という事実を、しっかり押さえておく…、ということだね」

アプとズコは、あまり得心はできません。それでも源蔵爺さんの熱を帯びた言葉に、思わずコクリと頷いてしまいました。

このように、洞窟内のスクールではディスプレイを用いた学習の後には、先生役と生徒との間で必ずやり取りを行っていました。源蔵爺さんの都合が悪いときには、千佳婆さんが先生役を買って出て、フェースツーフェースの教育は一度も欠かしたことがありませんでした。

「話は変わるけど、もうすぐ冬になるが、ホサピレースはどうなるのかな？」

歴史の勉強が一息ついたとき、源蔵爺さんが切り出しました。

「冬の間はないと思います。家を出るとき、パーリオ様はシーズン最後のビッグレースが来週に、って言っていたから」

ズコが、朝のことを思い浮かべて答えました。

「そうか、レースは無いか。しかも、この辺りは氷や雪に覆われて、谷川も凍りついてしまうから」

「もう、ここには来られなくなるの？」

アプが、心細い声をあげました。

「ウム、滑って転んだり、崖から落ちたり。吹雪で道に迷ったら、凍傷はおろか、運が悪いと凍死の危険もあるからなぁ」

そう言いながら、源蔵爺さんは腕組みをしています。

「君たちは今年の春に、この近くにやってきたと言っていたね。それまでは？」

「ずっと北にあるホサピ牧場です。その牧場の中にある〝増産所〟というところで生まれて、十歳までいました」

「そこでは沢山のホサピが飼育されている訳だ。そうすると大きな体育館のような建物があるのではないかい？」

「ハイ、ホサピは丈夫な体づくりが大切だということで、小さい頃から体操ばかりさせられました。大抵は牧場でしたが、雨の日や冬の間は大きな建物の中で駆けっこや相撲など、いろいろな運動を…」

「そうか、その体育館だ！」

源蔵爺さんは大声を上げると、アプとズコの頭を抱えるように両手で引き寄せました。そして、今度は声を潜めて二人に何事かを囁いています。

パンパカパー　パッパッパッパンパカパー　パッパッパッ…。

ファンファーレがスタジアムに鳴り響き、出走ホサピ十八頭がゲージに入ろうとしています。本日のモミジ杯は、十二歳以下で最も早いホサピを決める今シーズン最後のチャンピオン争奪戦であり

ます。距離は千メートルでコースは芝、ほぼ無風に近い絶好のコンディションであります。

テンポの速い実況アナウンスが流れています。そこは、アプとズコが初めて出走したスタジアムで、二人にとっては記念すべきコースです。気温は十度を下回り、肌を刺すような寒さであります。しかし、優勝を目指しているズコは、一時間近くジョギングを繰り返して体を十分に温めていました。一方、アプの方は出走前の調整が遅れて、紫のランニングシャツとショートパンツ姿になると震えが止まりません。それでも屈伸運動や何本かのダッシュで懸命にコンディションを整えています。

ズコは緊張で顔が強張っているのを感じました。頬を両手でぴしぴし叩きながら、隣のコースにいるアプを見ます。体が温まってきたアプは、『大丈夫よ』と励ますような眼差(まなざ)しでズコを見つめ、真っすぐ出走ゲージに入っていきます。アプの目を見て少し安心したズコは、高ぶる気持を抑えながらゲージに入りました。

再び、実況中継のアナウンスに戻りましょう。

出走前の興奮と緊張が、満員のスタジアム全体を覆い、大きな歓声が湧き上がっています。手元の資料によりますと、アプは十一歳になったばかりで、体重も出走ホサピの中では少ない方であります。しかし、このコースでは春に圧倒的な強さで勝っているので、オッズは一番人気となっています。ほかには十二歳のタイガーホマレ、ドラゴンキッズが人気であります。春の十歳レースでアプとデッドヒートを演じたズコの方は、出走が近づいても人気は上がりません。いよいよ出走の時間になりました。出走ホサピ一八頭がすべて、いや一頭が入りません。外枠の一頭が嫌っているようでありますが…、いや、入った。いま入りました。

各ホサピがいま、一斉にスタートしました。きれいなスタートと言っていいでしょう。体格がずば抜けて大きい十二歳ホサピ、タイガーホマレが先頭に出ました。その後にドラゴンキッズがしっかりつけています。一番人気のアプは首をぐらぐら回す独特のフォームで、中ほどから六番手、そして五番に上がってきました。各ホサピは一列になって第三コーナーから第四コーナーに…。

実況のアナウンスを待つまでもなく、二周目に入るとアプはトップに出ました。その後を数頭のホサピが追いかけ、ズコはまだその後を追っています。あと半周近く、残り三百メートルに差し掛かる頃に、アプは首の振りを大きく誇張して、スピードを落としました。数頭のホサピが、素早くアプを追い越して行きます。それらトップ集団の後につけていたズコが、猛然とダッシュをかけます。体を左

右に振るフォームは変わることがありません。最終コーナーを駆けながら、ズコは四番から三番、さらに二番手のホサピに迫ります。そして、ゴール寸前で胸を大きくせり出してトップを奪いました。二着との差は、わずかに体半分でした。

スタジアムは大歓声で沸きあがっています。ズコの勝利は全く予想外の番狂わせだったので、配当も大きな金額にはね上がっています。レースをオーナー席で観戦していたパーリオとその妻は、洋ダルの縁を吸盤だらけの手でバンバン叩いて大喜びをしています。周囲のオーナーたちは興奮してはしゃぐ夫婦に顔をしかめていますが、その目は羨望に満ちていました。ゴール直前で勝利をさらわれたドラゴンキッズのオーナーは、半透明の顔を紅潮させて悔しさを露わにしています。それらのオーナーたちを尻目に、パーリオ夫妻は席を立ち、ウィナーズサークルに向かいます。もっとも〝席を立ち〟という表現は〝キャスター付きの洋ダルを始動させて〟と言うべきでありましょうか。

ウィナーズサークルに、ズコが満面の笑みを浮かべてやってきました。懸命に走ったので呼吸がまだ荒くて汗も乾いてはいません。そのズコの両手を、パーリオ夫妻は片方ずつ握って祝福し、褒(ほ)めちぎりました。夫妻はズコたち二人が言いつけどおりに走ったこと、加えてズコの勝ち方が迫真の演技で、誰の目にも自然な走りに見えたことに大満足をしていました。

優勝の表彰と記念撮影が済むと、アプとズコはパーリオ夫妻の後についてスタジアムを出ます。レースからだいぶ時間が経ったので、二人とも体が冷えてきました。先ほどとは違って、外は強い北風が吹き始めています。アプとズコは、ジャージの上にウインドブレーカーを重ねてみましたが、それでも震えるような寒さです。すぐにパーリオが手配した専用のワゴンが出入り口に横付けされました。保冷車に似たワゴンの後部ドアが開くと、アプとズコは先を競うように飛び乗りました。その専用車は暖房がよく利いていて、車内には温かいスープなどの飲み物も用意されていたのです。

その夜、アプとズコはパーリオ夫妻から食糧倉庫に来るように呼ばれました。二人が倉庫に入ると、フロアの奥の物陰にテーブルと椅子が用意されています。イカタックの掟では、ホサピを家に入れたり共に食事をしたりすることはありません。このことは読者の皆さんが、馬や牛、羊などを家に招き入れて食事をすることがないことを想像して頂ければ、よく理解できると思います。パーリオ夫妻も、アプとズコを自宅に招き入れることはしませんが、食糧倉庫の中にテーブルと椅子を持ち込んでいたのです。

アプとズコは、経験したことのない待遇に驚いて、フロアの中ほどでモジモジしていました。その二人に、ペクールがやさしい声を掛けました。

「さあさあ、こちらに来て椅子に掛けなさい。お前たちは本当に賢いホサピだから、ご褒美に思い切りご馳走を食べてもいいわよ」

「今日は最高だったぞ。お前たちはワシの言いつけを実によく守った。それにズコの勝ち方が素晴らしかったな。あれ程までに出来るとは、中々のものだよ」

パーリオはワイングラスを手に、この上もなく上機嫌です。

「実を言うと、僕は精いっぱいでした。いまのフォームでは早く走れませんから」

ズコは椅子に掛けながら、パーリオに答えました。

「いやいや、そう言って謙遜するところがまた可愛いよ」

パーリオは目を細めて、テーブルに載っているお祝いの鯛やローストビーフをズコに勧めます。ズコは料理を小皿に取り分けながら、苦戦した理由には練習不足も大いにあると思いました。なぜなら、練習時間の大半は地底湖の奥にあるスクールで勉強をしていたからです。しかし、それをこの場で言うわけにはいきません。

「私の走りも良かったでしょう」

アプも、料理を頬張りながら口を挟んできました。

「ああ、良かった。一番人気のアプがゴールの手前までレースを引っ張ったから、スタジアムの盛り上がりは凄かったな」

「私も大穴を当てて、大事な貯金が増えたのよ、とても嬉しいわ」

妻のペクールも手放しで喜んでいます。

「今シーズンは今日で終わったが、ズコとアプ、来シーズンも頼むぞ」

パーリオはワインの酔いで半透明の顔を赤く染めながら言いました。

「実は、そのことでお願いがあるのですが…」

ズコが、パーリオの目を見ながら切り出しました。

「何かな、ズコ。お前の言うことは何でも聞いてやるぞ」

「有難うございます。実はシーズンオフの過ごし方ですが、冬の間は練習がしにくいですよね」

「ウン、この辺はどこも雪や氷で覆われてしまうからな」

「練習ができないと、来シーズンが心配で…」

「そうだなあ、南の暖かいところにキャンプでも張るか」

「それも悪くはないですが、ホサピ牧場には大きな体育館やトレーニング施設があります」

「そうか、ホサピ牧場には幾つも体育館があるなぁ。その中でも増産所の近くにある体育センターなら、筋トレもしっかり出来る」
「ハイ、僕らはホサピ牧場で育ったから、体育館でよく運動をしました。とくに、体育センターは設備も揃っています」
ズコは、パーリオ夫妻とアプの顔を見ながら言いました。
「私も、体育センターがいいと思います。あそこは広くて、とても走りやすいわ」
アプも、即座にズコの後押しをします。
「体育センターはイカタック シティに近いし、ワシの顔も利く。お前たちが望むなら、あそこにするか」
イカタック シティというのは、本州最北端の下北半島にある侵略者たちの首都で、彼らの移住ロケットが最初に着陸した場所でもあります。陸奥湾に面した平坦な地は、原水爆が炸裂した都会から遠く離れていたため、放射線汚染の程度が軽かったことが、着陸地の決め手になったようです。宇宙を彷徨(さまよ)っていた彼らのロケットの群れは、斥候(せっこう)役のロケットからの情報で次々に着陸して、この地に大都市を建設していったのです。
侵略者たちは最初、核シェルターや地下壕から出てきた人間たちを見つけ次第、射殺していました。しかし、人間が高度な知能を持っていることが分かると、今度は奴隷として労役に使います。しかし、奴隷には反抗的な者が多くて、問題行動が絶えませんでした。そこで、侵略者たちは使い勝手のいい家畜のホサピを開発していったのです。
イカタック シティの北東の外れには、ホサピの雌雄を交配して、ホサピの子を産ませる増産所がありました。そのレンガ色の建物から先は見渡す限りホサピ牧場で、緑の芝生のあちらこちらに校舎に似た細長い建物や屋根の大きい体育館が建てられています。牧場は、遥か遠く尻屋崎まで途切れることなく続いていて、年間一万頭を超えるホサピが世界中に送り出されていたのです。
「ズコやアプの言うことはよく分かった。牧場の体育センターであれば冬の間にも練習ができるからな。早速、明日から関係の部署に根回しをしよう」
「本当ですか、牧場の体育センターに行けますか？」
「ああ、大丈夫だ。体育センターを管理している連中とは日頃から仲良くやっているから、すぐに話はつくだろう」
パーリオの自信に満ちた言葉に、アプとズコは目を輝かせました。
（以下次号）

待ちぼうけ

中川とら

待ちぼうけの　六月は
小糠雨降る　一人道

届かぬ知らせを　待ちかねて
思い余って　出かけたけれど
訳分からない　一人道

傘さす手まで　しっとり濡れて
スカートの裾が　絡みつく

いっそ
きなり色の曇り空
傘でつついて　こじあけて
見てみたいよ　青い空

待ちぼうけの　六月は
露草の花咲く　一人道

草深の原

草深の原
私のふるさと

東雲に　目さめて
見上げる　果てなき大空　陽の光

サワサワとザワザワと
風に波立つ　草　草　草

文学の思い
満ちて誘う　魅惑の草原

草深の原よ
私のふるさと

身の丈を遥かに超え
　乱立するあなた達
地を這って繋がる
　てらいなき群生の生命

真夏の炎天に炎上する
　官能の息
群れてなお自立する
　一本のかんばせ

ここに立てば
ああ
私など　何事もなく
食われてしまいそうだ
しおしおと　うなだれるだけだ

無題

空が
あんまり澄んでいるから
君たちの　名まえを
呼んでみたくなる

太鼓持ち

唐瀬　光

1

その男が赴任して来たのは、十一月も半ば、木枯らしの吹き始める季節だった。

翌日、各部門の幹部社員を集めて開催された事業所長会議で、常務の原島（はらじま）が親会社から派遣されて来た新社長の皮崎（かわさき）を、うやうやしく紹介した。

五十歳を超えているだろうその男は、黒い影のように立ち上がると、居並ぶ出席者の顔を鋭い目つきで見渡した。それから、その強面の顔をぐっと反らして就任の挨拶を始めた。背丈はかなり高く、その身体は武道でもやっているかのように筋肉が盛り上がっていた。首から垂らしたオレンジ色のネクタイが風もないのに揺れている。

「この度、親会社の食品事業部から来たカワサキです。この会社のことは取引の関係上、かなり詳しく存じています。現にこの席にも、私の知っている顔が幾人か見受けられます」

会場には、その幾人かだろう、嬉しそうにこの男を見つめている社員たちがいる。彼の隣に座っている原島も、相槌を打つようにその丸っこい顔を上下させていた。

「会社が発展するには、『運』というものが大きく影響します。私は

これでも運はいいんですよ。こんな私が来たからには、この会社は必ず伸びます。ここに集まっている人たちは皆、管理職ということだが、幹部なら、昼も夜もノイローゼになるくらい会社のことを思い、職位以上の働きを見せてほしい。男なら、必ずできるはずだ！」

彼は次第に声を張り上げ、突然右手のこぶしを卓上に振り下ろした。ドン！　という音がして皆一瞬縮みあがったように肩をびくつかせた。

皮崎はそんな社員たちを満足そうに見回すと、おもむろに着席した。

すかさず前列から、背のヒョロッとした四十過ぎの男が立ち上がった。彼は大きなメガネをかけた細長い顔に満面の笑みをたたえて、歓迎の辞を述べ始めた。

「わたくしたちは、今ここに、新しい社長をお迎えいたしました。このような気骨のあるすばらしい方は、我が社始まって以来のことと思います。不肖このイバヤシも、新社長のご指導を仰ぎ、会社のため、みなさんのため、粉骨砕身、努力する覚悟でございます。さあ、みなさんも立ち上がって、一緒に気勢をあげようではありませんか」

席にいる者皆が立ち上がるのを見届けると、彼は握りこぶしを振り上げ、「オオッ！」と一声吼えた。つられて一同一斉に唱和する。次いで激しい拍手が巻き起こった。

新社長の皮崎はその様子を、満足そうな顔で眺めていた。

「トシちゃん、あれ、すごいパフォーマンスだったなあ。さすが次期総務部長！」

会議が終わって出席した社員たちがエレーベーターホールに集まっていた時、常務の原島が揶揄するように彼の肩を叩いた。

「パフォーマンスじゃないですよ。本気ですよ、本気。常務だって、よくやるじゃないですか。嫌だなあ、人聞きの悪い……」

トシちゃんこと井林俊彦（いばやしとしひこ）は照れたように頭を掻いた。

その二人を周りの者が白けた様子で見ていた。

「まあそれは置いといて、今度の社長はすごい。あの人なら大胆に会社を改革する力がある。前の人とは比べものにならないぞ」

原島は急に真面目な顔になった。その真剣な様子は周りの者に、彼が心底新しい社長に傾倒しているかのような印象を与えた。

（あれっ、この言葉、以前にも聞いたことがあるぞ。確か前回の社長交代の時だったか……）

彼らの後ろに立っていた経理課長の水村（みずむら）は、どことなく違和感を

覚えた。

その日から、新社長の皮崎は精力的に動き始めた。

彼はまず部門ごとに社員を集めて懇談会を開いた。懇談会といっても、社内の会議室でお茶を飲みながらではない。銀座や秋葉原の料亭を使うのだ。当然お酒は飲み放題。料理は高級なものを取り放題。招かれた一般社員やＯＬたちは大喜び。たちまち彼は人気の的となった。

やがて飲み会の順番が経理部に回って来た。水村は部下三人（男一人、女二人）を連れ、秋葉原にある皮崎の行きつけにおもむいた。店の暖簾をくぐると、そこにはすでに原島が来ていた。常務の原島は総務部長ばかりでなく経理部長も兼務している。彼の隣には、なぜか総務部の井林もいた。

その店は、ＪＲ秋葉原駅から少し離れた所にある高級な料亭だった。出て来た女将も紬の和服を艶やかに着こなし、もちろん『ご主人様』なんて言葉は使わなかった。

水村たちが店にはいっていくらも経たない内に、皮崎がその大柄な身体を屈めるようにしてはいって来た。彼は一斉に頭を下げる一同に向かって「おおっ」と片手を上げると、慣れた様子で空いている上座に座った。まるで皆が揃うのを見計らっていたかのような、タイミングのよい登場だった。

出て来た鍋料理は、薄給の水村にはとても手が出ない豪華なものだった。卓上コンロに火を入れ食材がグツグツ煮える間に、井林が主催者のような顔で挨拶をし、社長の皮崎が長たらしい演説の後、乾杯の音頭をとった。

一同、手にしたビールを飲み終わると、皮崎はテーブルの碗をとって鍋の料理をすくい、自らみんなに配った。碗を手渡された者はいたく感激して、原島なんかは「ハハァー」と大仰に頭を下げていた。

この席で皮崎は「若い頃、売掛金の取立に行ってヤクザと渡り合ったことがある」とか、「自分は武道をやっているから、喧嘩には負けたことがない」とか、これまでの武勇伝を誇らしげに語って聞かせた。

「武道って、なにをやっているんです？　やっぱり柔道とか、剣道ですか」

水村が聞くと、皮崎は嬉しそうな顔で「居合（いあい）だよ」と答えた。

「居合って、刀を振る、あれですか」

隣の原島が（バカなことを聞くな）というふうに目配せしたが、皮崎の顔に、感情を害した様子は見られなかった。

「そうだ。俺はまだ二段だけど、居合道の二段は剣道五段の力がある

のだ」
彼は片膝を立て、両手で刀を摑むようなしぐさをすると、「オオッ！」という掛け声とともに頭の上から振り下ろした。
みんな一斉に感嘆の声をあげる。原島が「いよう！　お代官様」とはやし立てた。皮崎はさも満足そうに、どかっと腰を下ろした。
皮崎の下の名前は三厳と書いて(みつよし)と読む。三厳といえば、新陰流の達人、柳生十兵衛のことだ。柳生十兵衛三厳(やぎゅうじゅうべえみつよし)というのがかの剣豪の名前だが。水村が「その名前をもらったのですか」と尋ねると、彼は（よく聞いてくれた）と言わんばかりの顔をして「おおっ、そうだよ」と顔をほころばせた。その様子に、皮崎の隣に陣取っている井林がちょっと悔しそうな表情を見せたが、すぐ何事もなかったようにうなずいていた。

2

月が替わって、前月の決算ができあがった。
「課長、すごいですよ」
部下の古橋(ふるはし)が書類の束を水村の机に置きながら、あきれたような口調で言った。
「なにが、すごいんだい」
水村はその書類を手に取って、ざっと目を通していたが、ある一点に驚きの声を上げた。
「な、なんだ、これ！」
「でしょう！」
古橋は水村の驚く様子を面白そうに見下ろしていた。
先月会社が使った経費の中で、飲食代が飛び抜けて増えていた。それも総務部のだけが。
「間違い、じゃ、ないよな……」
水村は上目遣いに古橋に確認した。
「間違いではありません。ほら、この通り」
彼は書類の中から一枚の補助簿を抜き出して、水村に示した。それは総務部の飲食代を日付順に記帳したものだった。その数は五十数件。飲み食いに使った費用は二百万円。これまでは、その十分の一にも満たなかったのに。
「一か月の就業日は二十日ぐらいだろう。なんで五十件もあるんだ？」
「だって、一次会だけじゃ終わらないでしょう。それに、土曜も日曜も、出てるそうですよ。あの人たち」

「あの人たち？」
「シャチョウと、ジョウムと、イバヤシさん」
古橋は身体を屈めるようにして、水村の耳元にささやいた。
「仕事のためにか？」
「まさか。ゴルフですよ、ゴルフ。交際費を見て下さいよ。頼みますよ、もう……」
彼は水村の不明をなじるような表情を見せて、自分の席に戻った。
「そんなに申請が出ていたかなあ……。愛子さん、ちょっと」
疑問に思った水村は出納係の佐藤愛子に視線を移した。
みんなは、佐藤という名字の社員をファーストネームで呼んでいる。なにせこの会社には『佐藤』さんが、十数人もいるのだから。
「先月の交際費と会議費の申請書を見せてくれないか。総務のだけでいいから」
「課長、ダメですよ。社長のは、ありません。そのことを常務に言ったんですけどぉ、社長の使ったものは必要ないと言われました」
「常務が、そう言ったの？」
「ええ、規則だからと言ったのですが、常務は『社長の言うことが規則だ』と、こうおっしゃいました。『そのことは課長も知っているはず』だと……」
彼女は、その丸い顔をかしげて、（腑に落ちない）という表情をしていた。
その時、水村は先日の飲み会で皮崎の言った言葉を思い出した。
「いいか、経理は会社の要だ。だから規則だけはしっかり守らせるように。特にこの会社は社員同士の飲み食いが多い。しっかり監視してくれよ。……ただし、俺の分は、その必要はないと思うが」
それを聞いたみんなはドッと笑った。経理部長を兼ねている原島は、うなずくように顔を上下させていた。
（あれは、冗談ではなかったのか。それにしても、酒の席で規則の改廃を決めるなんて……）
各部門との会食は一巡したはずなのに、翌月も、その翌月も、飲食代は増え続けた。夕方五時前になると、彼ら三人は終業時間を待たずに席を立った。井林は大きなカバンを下げて、いそいそと皮崎の後を追い、常務の原島は「じゃあ、そういうコトで」と、なんのことかわからないような言葉を残して、ゆうゆうと事務所を出て行く。その様子を、まだ勤務中の社員たちは苦笑いしながら見ていた。
水村が領収書を調べてみると、彼らの行きつけの店は数件。銀座、赤坂、秋葉原と日替わりに通っているようだ。インターネットで検

索してみると、その全部が一流の料亭やクラブだった。これでは一晩に十万円もかかるはずだ。店の飲み代は一旦井林が立て替えて払うらしい。だが、その請求が経理に上がって来るのは、いつも月が替わってからだ。翌月になれば、目につかないとでも思っているのだろうか。

あまりにひどいので、ある日、上司の原島に意見した。

「こんなに飲み食いに使っていたら、そのうち税務署にやられますよ。会社の費用には認められず、社長の役員賞与として源泉課税です。悪くすると重加算税ですよ。経理部長として、社長に忠告してもらえませんか」

水村がそう進言すると、原島は「そんなことはない！」と声を荒げた。

「社長は、この会社のために、率先して得意先と商談をしているのだ。単なる飲み食いではない。税務署が来たら、そう説明して納得してもらえよ。それが君の役目じゃないか」

原島は珍しく顔を真っ赤にしていた。

上司の言うことなので、それ以上追及できず、引き下がらざるを得なかった。

（前の経理部長はよかった。多少偏屈だったが……）

水村は厳しかった前の上司を、なつかしく思い出した。

その日も彼らが退社した（出かけたと言った方がいいか）後、終業時間となったので帰ろうとしていると、恰幅のいい中年男が傍にやって来た。営業課長の住田だ。彼は水村の目を見ながら、さかんに指でなにかを飲むしぐさをしている。（一杯どうだ）と言っているのだ。別に断る理由もなかったので、彼と一緒に会社を出た。夜の両国をしばらく歩くと、『伊賀屋』と看板の出ている店があった。水村と住田の行きつけだ。ここには、会社の者はまず来ない。それでも二人は目につかないように一番奥の席を取った。

「なあ、あいつのことだけど……どう思う」

彼は水割りをちびり、ちびり舐めながら、そう聞いて来た。

「あいつって？」

誰のことだかすぐ察しがついたが、わざととぼけた。

「わかってるくせに」

住田は上目づかいに水村の顔を窺った。

「実は、城南営業所の薫が見たんだ。やつらが銀座の店から出て来るのを」

「銀座……」

水村はカバンから黒表紙の手帳を取り出した。そこには皮崎たちが飲食した店が書いてある。経理に回って来た領収書を見ながら、一つ一つ書き写したものだ。
「銀座……ハルナか。それは先週の木曜だな」
手帳を見ながら住田に尋ねる。
「ああ、そうだ。その店はウチの得意先なんだ。だから営業の者は時々飲みに行く。もちろん自費で」
彼は水村の手帳を覗きながら、「よく、つけてるなあ。さすが経理課長」といくぶん揶揄したような声を上げた。
「頭の隅に引っかかるんだ。なにか悪いことが起こりそうな」
水村は人差し指で自分のこめかみをつついた。
「もう起こってるじゃないか」
「いや、飲み食いやゴルフだけじゃなく、もっとなにか黒いことが」
水村は「ハルナ、ハルナ」とつぶやきながら、手帳を確認する。
「ハルナは毎週木曜だ。同じ日に両国の寿司屋にも行ってるから、二次会だな。ああ覚えている。次の朝、社長室にハンコをもらいに行った時、そこに常務がいて、『その後、井林君といい所に』なんてニヤニヤしながら話してたから、最後まで一緒じゃなかったのか。常務と井林はあれから三次会でも行ったのかな？　そう言えば、井林は昼過ぎに重役出勤だったなあ。いつものことだけど……」
「三次会？　それ、ないんと違うか。薫の話じゃ皮崎は店の前からタクシーで帰ったが、後の二人は女連れで何処かへ行ったそうだ」
「女？　商売女か」
「だろうな。あの店は一応クラブなんだが、ピチピチの若い子がいっぱいいる。女子大生とか女子高生とか。どうだ、行ってみるか。会社の経費で」
「バカ、経費で落ちるワケないだろう」
「でも、現に落としてるんだろう。あいつらの使った分に関しては。社長と経理部長が認めてりゃ、いくらお前でも文句が言えんわな」
彼は覗くように水村の顔を見上げた。
「問題は、それが接待かどうかだ。そこに得意先の人は来てたのかな？」
「来てるワケねえ！」
彼は吐き捨てるように言ってから、「ハルナか……ちょい覗いてみるか……」とつぶやいた。
「覗くって、スパイか？　それって危険じゃないか。見つかったらどうするんだ」
「おいおいドラマじゃあるまいし。俺も、あの店には昔よく行った

もんだ。もちろん営業の仕事でだけど。今もたまに行く。俺のボトルが置いてあるんだ。鉢合わせしたって変には思われないだろう」
彼は「なあ、一緒に行くか？」と誘って来たが、水村は断った。堅いと評判の水村がクラブなんかにいたら、疑惑を持たれるのは目に見えている。皮崎という男は一見豪胆な風貌をしているが、根は猜疑心の強い人物のように思われる。

3

次の木曜日が来た。明日は月次決算の提出期限なので、終業時間になっても水村は帰れそうもない。腕まくりして書類にハンコを押していると、部下の古橋が「課長、お先に」と言って、そそくさと事務所を出て行った。
「あいつ、早いな。まだ決算が出来てないのに……」
しかめっ面でつぶやくと、パソコンを睨みつけるようにしていた愛子さんが振り向いた。
「飲みに行くんじゃないですか。さっき課長のいない時に、井林さんとなにか話していましたから」
（井林……）
嫌な予感が頭の隅をよぎった。
「それより課長、古橋クンに言って下さいよ。あの子、最近遅れて来るでしょう。仕事ができるのはわかるけど、だからって遅れていいもんじゃないでしょう。みんなに示しがつきません、示しが！」
愛子さんの目尻が、ネコ科の猛獣のように吊り上る。
「ああ、わかった。わかった。今度きつく言っとくよ」
いつものお小言が始まってはたまらないので、早々に仕事に取りかかる。
「頼みますよ、もう。頼りないんだから」
彼女の非難するような声がビシッと胸に刺さった。

八時を少し回ったところで、隣のスペースに机を並べている総務部の電話が鳴りだした。今時、総務には誰もいない。総務部長を兼務している原島も、課長の井林も、今頃は銀座のハルナで皮崎のご機嫌とりに忙しくしているに違いない。井林の下にいる三人の総務課員は終業時間とともにいなくなるのが日常だ。親が親なら子も子ということか。
営業部にはまだ何人か残っているようだが、衝立で仕切られているので聞こえないのかも知れない。それでなくても、この会社では、

よその部にかかって来た電話は取らないという暗黙の了解がある。
コール音は鳴り続けている。どうしようかと迷っていると、愛子さんが（うるさいわね！）という顔をして、しぶしぶ受話器を取り上げた。
「警察？　逮捕？　ええっ！」
突然彼女は素っ頓狂な声をあげた。隣で伝票の整理をしていた渡辺さんも思わず手を止める。
「誰が逮捕されたって？」
まだ居残っていた営業の男性社員が、衝立の間からどやどやと現れた。電話の音は、みんなにしっかり聞こえていたらしい。
「カワムラ・マユミはたしかに当社の社員ですが……。えっ、ウチの社長ですか？　もう帰りましたが……携帯にかければ通じるかと……番号は……」
営業部の面々が愛子さんに顔を近づけ、電話の声に耳を澄ます。彼女は厭そうにシッシッと片手で周りの男たちを追い払ってから、おもむろに受話器を置いた。
「で、なんだって？」
水村は半身を乗り出して尋ねた。周りの者も興味津々彼女の口元を注視している。
「信濃町の警察署からよ。企画室の川村さんのこと。あの人、今警察にいるんだって。なんでも事件の重要参考人なんだって」
「事件？　川村さんが？　なんの？」
「さあ、詳しくは言わなかったわ。皮崎社長を出してくれって。社長ならアリバイを証明してくれるかもって、そう川村さんが言ってるらしい」
川村まゆみといえば、企画室の主任で、歳は二十八。色白で小づくりの顔。やわ肌のほっそりとした体つき。胸には可愛らしいお椀のような膨らみ二つ。どこから見ても美人。それも社内一。いや、聞くところによれば、我が社始まって以来の美女だとか。彼女はプロパーではなく、二、三年前にほかの会社から移って来た人だ。
「皮崎社長と、あの子と、なんの関係があるのだろう？」
水村が首を捻ると、愛子さんは奇妙な表情を浮かべた。いや彼女ばかりでなく、渡辺さんや周りの男性社員たちも、お互いに目配せして薄笑いを浮かべている。
「課長、経理の仕事ばっかりじゃなく、少しは社内の人たちに関心を持ったらどうなんです。そんなだから、いつまでたっても部長になれないんです」
周りの者がドッ！　と笑った。

「その通り！　愛子さんいいこと言う」
特売課長の岸本(きしもと)が手を叩いて賛同した。みんなウンウンうなずいている。水村は赤面したが、自分でもそう思っていたので言い返せなかった。
「コレですよ。コレ」
岸本は小指を一本立てた。
「コレ？」
見回せば、ほかの男たちも皆小指を立てている。
「水村さん、ホントに知らないのですか？」
彼は両手を机の端に置くと、水村の顔を覗き込むようにした。
「じゃあ聞きますが、社長は今どこに住んでいるんです？」
「うーん、最初は埼玉の実家。それでは遠いからって、会社で吾妻橋の近くにマンションを借りた。だから、今はそこから通っているらしいけど……。でも変だよなあ。埼玉からなら、そう通勤に不便じゃないのに。妻子は実家に残したままだと言うし……」
「まゆみは？」
「ウチに来た時は茨城だったな。この前聞いたら浅草とか……いや曳舟だったか……。よく知らない」
「経理課長が、これだもんな。しっかりして下さいよ、ホントに」
岸本はあきれたように天井を見上げた。
「しかたないだろう。総務に社員の住所を聞いても教えてくれないんだ。なんでも個人情報保護法に抵触するからとか言って。でも、なあ、実際金を出してるのは経理で、支払いをチェックしてるのは俺なんだから。経理部長の常務には住所録を渡してあると言うんだが……」
水村は不満そうに腕組みをした。
「実は見たんですよ、この俺が。社長と川村まゆみが隅田川のほとりを歩いているところを。なんかべったりという感じで、皮崎はまゆみの肩に手を回していましたよ」
周りの者は皆、岸本の話にうなずいている。知らないのは水村だけのようだ。そう言えば、この前、会議室で川村まゆみと帳簿作成の打ち合わせをしたことがあった。その時は話のついでに冗談などを言って、お互いに笑い合った。だが、経理の席に戻って来るなり、井林が近づいて来て、「仲のおよろしいことで」と揶揄するような言葉を投げかけて来た。その時は単にからかわれただけだと思ったが、今思い起こせば、彼はなにか下心がありそうな陰湿な笑いをちらつかせていた。

それから皮崎と川村まゆみの関係について、仕事そっちのけの白熱した議論が続いた。みんなとても嬉しそうだ。
（他人の不幸は蜜の味とかいうが、まさにこれだな）
水村はあきれながらも、いつの間にか身を乗り出して、みんなの話に聞き入っていた。
その時視野の隅を黒い影がよぎった。そちらに目を向けると、井林が背中を丸めてコソコソッと自分の机に近づいて行くところだった。
その場にいた者が皆（しまった！）という顔をした。井林に聞かれたということは、皮崎の耳にはいったのも同然。岸本たちは顔を青ざめて、そそくさと自分の席に戻って行った。
だが、井林がご注進に及ぶまでもなかった。部屋の入り口から黒い大きな影が、まさにのっそりと現れた。
（カワサキだ！）
その場がたちまち凍りついた。水村は急いでパソコンの画面に見入り、愛子さんや渡辺さんは下を向いて熱心に書類と取り組んでいるふりをする。
皮崎はいつものようにオレンジ色のネクタイを揺らしながら、傲然と事務所の中央に進んで来た。だが、その足取りは、ややふらついているようにも見える。顔は赤黒く変色し、むっとするような酒の臭いを撒き散らしていた。
彼は水村ら経理の面々をジロリと睨むと、なにも言わず、衝立の間を通って岸本たちの方に向かった。愛子さんと渡辺さんが同時に「ほおーっ」と安堵の息を吐く。その声がはっきり耳にはいって、水村は（井林に聞こえたのでは）と、思わず総務の方を振り向いた。でも、彼は額に青筋を立て、ガサゴソとなにかの書類を探している様子で、こちらに関心を向けているようには見えなかった。
「おい、岸本！」
その時、衝立の向こうから皮崎の怒鳴り声が聞こえた。
「今なにを話してた！　もう一度、言ってみろぉおおお！」
事務所の隅々にまで響き渡るような胴間声だ。恐怖のせいか、渡辺さんの手にした書類が震えている。
水村はさりげなく立ち上がるとスチール棚の所に行き、書類を取り出す様を装いながら、チラリと営業部の方を覗いた。するとそこには、仁王立ちになって四人の男を睨みつけている皮崎の姿があった。
「えっ、なにしてたって？　私らは、ただ販売の打ち合わせをしていただけですが……」

小柄な岸本は皮崎を見上げるように立っていた。その顔には、どこか人を食ったようなふてぶてしさが表れていた。
皮崎の顔が怒りに膨れ上がった。
「イバヤシ！」
大声で総務の井林を呼ぶ。
呼ばれた井林は一瞬肩をびくつかせたが、手元の書類を放り出すと、小走りに皮崎の傍にやって来た。
「こいつを……」
皮崎は人差し指をピタリと岸本に向け、「解雇しろ！」と怒鳴った。
これには、さすがの井林も「それは……しかし……」と困惑したようにつぶやいた。
「かまわん、俺がそうしろと言っとるのだ。すぐやれ！」
「でも……一応、常務にも相談しませんと……人事は常務の担当ですから。それに、コンプライアンスの問題があるかと……」
「コンプライアンス違反なら、こいつらの方だ。川村クンが俺のなんだって？　その言葉はセクハラ以外のなにものでもない。明らかなコンプライアンス違反だ」
「では……コンプライアンス委員会にかけないと……」
「バカ者！」
躊躇するその態度にイラついたのか、今度は井林の方を怒鳴りつけた。額の血管が浮き出て今にもブチ切れそうだ。
「コンプライアンスの委員長は誰だ！」
「そ、それは、もちろん社長ですが……」
「では、その事務局長は？」
「そ、それは、形だけですが、わたくしということになっております」
「なら、問題なかろう。委員長と事務局長がいれば会議は成り立つ」
皮崎は胸を反らして岸本を見下ろし、おもむろに宣言した。
「本日ここにコンプライアンス委員会は、全会一致で、営業部特売課の岸本を懲戒処分にする」
「そ、そんな……」
井林は今にも泣き出しそうに顔を歪めた。このイエスマンにも、一応、物事の道理というものがわかるのだろうか。
その時、水村の脇を青い事務服の女が通り過ぎた。愛子さんだ。
彼女はツツツと社長の傍に行くと、その袖をつついた。皮崎が「ん？」という表情で彼女を振り返る。
「社長、よろしいのですか。川村さんが大変なことになっている様子ですが……」

それを聞くと彼は「ああっ！」と思い出したように叫んで、「イバヤシ、書類は見つかったか！」と怒鳴った。
井林は一瞬きょとんとした表情を見せたが、こちらも「ああっ！」と叫んで、「ありました。ありました」と、あたふたしながら総務の席に取って返した。
それから、皮崎は井林を連れて大急ぎで本社事務所を後にした。だが、出て行く時にドアの所でみんなを振り返り、「いいか、この話はオフレコだぞ。しゃべった者は処分だ。処分！」と恫喝した。
「なんなんだ。アレは！」
営業部の一人が吐き捨てるように言った。
「懲戒処分」と言われた岸本は青い顔をしていたが、昂然と顔を上げ、相変わらず人を食ったような顔をしていた。
（なんと肝っ玉の据わったやつだ。この男は……）
水村は岸本の超然とした態度に大いに感心した。
だが、彼はいつまでたってもピクリともしない。不思議に思った愛子さんが目の前で手を振ってみたが、目線は動かず、瞳孔は大きく開いたままだ。
「やだあ、この人、ショックで死んでるよ」
彼女は呆れたように片手を振り上げると、「しっかりせんかい！」と彼の後頭部をぴしゃりと叩いた。
「あんなの、デタラメに決まってるよ。大丈夫、そう簡単に解雇なんかできないんだから」
愛子さんは一生懸命慰めたが、彼の顔は粘着剤でも貼りつけたように動かなかった。この男の、いつも人を食ったような面構えは、単なる顔立ちに過ぎなかったのだろうか。

4

その夜、水村が自分の家に帰り着く早々、住田から電話がかかって来た。
「よお、まだ起きてるか？」
ケータイから彼の間延びした声が聞こえた。こいつの挨拶はいつもこれだ。こっちが毎晩残業で遅くなるなんて、考えたこともないに違いない。
「なんだ？　急用か」
「聞いたぞ、会社でやつが暴れたそうだな。岸本がやられたとか」
「うん、みんなで川村まゆみの噂をしているところを、ちょうど帰って来た皮崎と井林に聞かれた。それからが大変。やつが怒った

のなんの」
「わかる、わかる。目に見えるようだ」
「そっちは、なにしてたんだ？　朝から姿が見えなかったが」
「いつものように得意先回りさ。俺たち営業は売ってナンボだからな」
彼はそこから急に内緒話でもするように声をひそめた。電話だからその必要はないだろうに。
「実は……行ったんだ。今夜……」
「行った？　今夜？　まさか、ハルナに？」
「ああっ、今、信濃町にいる。面白いことがあったぜ。明日でもいいんだが、早いうちにと思ってな。おまえにも関係あることだから」
「俺に関係？　どういうことだ」
「一足早く店に行って、張ってたんだ。やつらが来るという席の隣で。ああっ、心配しなくてもいい。見つからないようにやったさ。そこの席は特上なのだ。ボックスの中は薄暗い。周りには観葉植物が置いてあって目隠しになっている。葉の間から覗けば見えないこともないが、女を侍らしてそこまでするやつはいない。張り込むには絶好の場所なんだ」
そう言って、彼はその晩店に現れた皮崎たちの様子を聞かせてくれた。その内容とはこのようなものだった。
住田がこの店に三つしかない特等席で、なじみのホステスと水割りを飲んでいると、皮崎が例の太鼓持ち二人を従えて隣のボックスにはいって来た。すぐに酒が運ばれ酒宴が始まった。酔っぱらった皮崎の耳ざわりな声が次第に大きくなる。それはつる性観葉植物ポトスの広い葉を通してビンビン聞こえて来る。
住田は耳を立てて話を盗み聞きしていたが、そのうち気分が悪くなった。なにせ話の内容ときたら、社員たち一人一人を取り上げて誹謗中傷するだけ。『誰それは無能だ。誰は鼻につく。誰は面従腹背だ。信用ならん……』
その中には住田や水村の名前もあったという。
特に女子社員の話になると気分が高揚すると見えて、一段と声が大きくなった。『あの子は胸が大きい。抱きがいがある。あの子はブスだ。本社に置いといてもしょうがない。あの子は、誰それが手をつけたらしい。けしからん、降格にしてくれる』
常務の原島は「ごもっとも、ごもっともでございまする～う」と、時代がかった大仰なセリフで座を盛り上げ、井林は「ええ」とか「まあ」とか、当たり障りのない相槌を打っている。誰ひとりとして槍玉に上げられた社員をかばう者はいなかった。

「三人とも傍にお気に入りのホステスを侍らせてよ。片手で彼女らの太ももを探りながらだからなあ。それに、ここの店は高いんだ。三人なら十万はするな。もちろん俺は自腹だが、やつらの飲み代は会社が持つんだろう」

住田は心底あきれたような口ぶりで話した。

「皮崎の下の名は三厳（みつよし）だったか……いつかお前に教えてもらったが、これ柳生十兵衛だよな。これじゃあ、今頃、本物の三厳は草葉の陰で泣いてるぜ。きっと……」

（泣くどころか、かの隻眼の剣聖がこの事実を知ったなら、愛刀『三池典太（みいけてんた）』を引っ提げて、芳徳寺（ほうとくじ）の墓所から飛び出して来ること請け合いだ）

「それによ、それから二人増えたぜ、意外な人物が。その一人はお前に関係がある……」

彼はなぜか言い淀んだ。

「二人増えたって？　俺に関係あるって？　誰だ、そいつらは」

「ああっ、一人は出入りの業者で、エンマ工業の社長。これは想定内だな。エンマ工業と皮崎の間には黒い噂がある。この頃、なぜか、必要のない機械を買ってるだろう。それも何千万もするやつを。工場の者は『皮崎にバックマージンが流れているのではないか』と疑ってる」

その噂は水村も聞いていた。なんでも、ある夜のこと、工場勤務の社員が忘れ物を取りに戻ったところ、誰もいないはずの事務所に明かりが灯り、奥の応接室からヒソヒソ話す声が聞こえた。彼は中にはいらず、そのまま自分の車に潜んで見張っていた。しばらくすると、事務所から皮崎とエンマ工業の社長が出て来た。その後幾日もしない内に、二千万円の機械が工場に届けられた。工場長は申請どころか、欲しいと言ったことすらなかった。購入の手続きは、すべて総務部の井林がやったという。

「そこで、もう一人だが……そいつが、お前に関係ある……」

住田は言葉を濁した。

「なんだ、もったいぶらずに言えよ」

「お前のよく知っている人物で、今は、お前の片腕になってるやつだ」

「俺の片腕……愛子さんか」

「バカ、愛子が片腕かぁ。自分の部下のこともよく見てないらしいな。この間抜け！」

彼は電話の向こうで声を立てて笑った。

「俺の部下……」

そこで、ふと思い出した。今日、みんなが残業しているのに一人だけ早く帰ったやつ。愛子さんがそのことで腹を立てていた」

「まさか……古橋？」

「そう、そのまさかだよ。古橋が来たんだ。エンマの社長と。つうか、古橋がエンマを案内して来たようだったな。二人が現れると、皮崎は大層喜んで古橋をほめてたぜ。『近いうちに、お前を課長にしてやる』とか言ってた」

水村はこの話を聞いて唖然とした。古橋は確かに有能だが、まだ二十代。肩書も、ヒラより一つだけ上の主任。愛子さんの係長より下だ。そんな者が一足跳びに、水村や住田と同じ課長になれるわけがない。だが、人事権は社長にある。推薦するのは常務の原島だ。

（あのヤロウ、いつの間に……）

ついこの前まで、皮崎たちの使い過ぎを非難していたくせに。

（それとも、あれは単に正義のふりをしていただけなのか。そして裏で皮崎たちと……すると、俺の言動は筒抜けだな……）

ざわざわとした疑惑が胸に巻き起こった。

「それから、八時頃だったか、皮崎のケータイに電話がはいったんだ。やつは立ち上がって俺のいる席のすぐ傍に来て話し始めた。おかげで、電話をかけた相手の声までよく聞こえたぜ」

その話はこのようなものだった。

電話の相手は男の声で信濃町警察署の誰それだと名乗った。彼は「川村まゆみさんは、お宅の社員ですか。あなたは社長の皮崎さんですか」と聞いて、「実は今、川村まゆみさんは事件の参考人として、ここにいます。川村さんは『自分は当日、事件のあった場所にはいなかった。その日は皮崎社長と一緒に商談に行っていた。社長に確かめて下さい』と主張しているのですが、その確証を取りたいのです。その証拠となるもの、例えば業務日誌ですね。それをすぐ持って来て欲しいのです。それが証明出来ないと、川村さんをここに留置することになります」と言った。言葉遣いは丁寧だが、有無を言わせぬ口調だった。

それに対して皮崎はいつもの傲慢な態度で返した。

「事件って、なんの事件だ。それが、川村クンとなんの関係があるのだ。お前、ほんとに警察か？　警察なら、なんの容疑か言ってみろ！」

「言ってみろ、って……」

電話の相手はしばし絶句していた。警察官にこういう無礼な言葉を吐く民間人なんてそういないのだろう。

「あなた酔ってるのか。こちらが親切に連絡しているのに、その態

度はなんだ。いいか、これは殺人事件だ。川村は容疑者なんだぞ！」
電話の中から怒る声が聞こえる。
ところが、皮崎はさらに胴間声を張り上げた。
「なんだとは、なんだ。殺人だとう。マユミがそんなことするか！それは誤認逮捕だ。いいか、俺は警視庁捜査課長のヨシダさんと懇意なんだ。署の刑事ぐらいなんとも思っとらんぞ。なんなら今すぐ彼に電話しようか。その方が、話が早そうだな」
皮崎の逆ギレに、電話の声が急に大人しくなった。警視庁のヨシダさんが効いたのだろうか。
「では、証拠書類を持って行けばいいんだな。わかった。これから行く。マユミを留置場なんかに入れるんじゃないぞ」
皮崎はケータイを仕舞うと「おい、イバヤシ！」と叫ぶように呼びつけた。
女といちゃついていた井林がぴょんと跳び上がると、犬のようにすっ飛んで来た。
「今から本社に帰る。川村クンの業務日誌を探すのだ。エンマは常務と古橋にまかせる」
そう言うと、皮崎はエンマさんに挨拶もせず、足早に出口に向かった。あわてて井林が後を追う。

住田はその一部始終を、ポトスの葉影から覗いていた。ふと前を見ると、なじみのホステスが一人つまらなそうに水割りを舐めていた。
彼は皮崎が出て行った後も、しばらく原島たちの様子を見ていたが、ただの酒盛りが続くだけで特別な進展はなかった。やはり皮崎でないと核心的な話はできないのだろう。
住田は店を出ると、信濃町に向かった。逮捕されたという川村まゆみの方も調べなければならない。なにせ、あの女は皮崎と同棲しているという噂がある。皮崎が来てからというもの、川村まゆみに近づく男性社員はほとんど本社から追い出された。二人の間になにかあるのは間違いない。
それから半時間後、信濃町のとある喫茶店に住田はいた。斜め向こうに警察署の玄関が見える。張り込みには格好の場所だ。あまり近くては門番の署員に怪しまれる。文庫本を読むふりをしながら、待つこと一時間、ようやく彼らがやって来た。皮崎はタクシーを下りると、いつものように傲然と胸を張って玄関に向かった。料金の精算を終えた井林が大きなカバンを抱いて彼の後を追う。やがて二人は警察署の建物に消えた。
さらに待つこと一時間、住田が何杯目かのコーヒーでお腹がだぶ

ついてきた頃、彼らが署から出て来た。今度はスタイルのいい小柄な美人を伴っている。川村まゆみだ。どうやら釈放されたらしい。

三人は通りをこちらへ歩いて来た。住田がカーテンの陰から覗いていると、井林が通りかかった一台のタクシーを止め、二人を後部座席に案内した。彼も乗るのかと思いきや、そのままそこに残り、遠ざかるタクシーに向かってペコペコと何度も頭を下げていた。やがて井林は大きなカバンを抱えて駅の方に歩いて行った。

「以上、こんなところだ。詳しいことは明日会社で話そう。そっちの話も聞きたいしなぁ。岸本も、やばいことにならなきゃいいが…」

住田はそう言って電話を切った。壁の時計は十二時を過ぎている。（もう、寝なきゃあ）と急いで風呂にはいり、床に就いたが、目がさえてなかなか眠れなかった。

5

翌朝水村が出社すると、廊下の壁に社員たちが群がっていた。女子社員たちが「きゃーっ、ひどい！」と騒いでいる。ざわざわとした胸騒ぎが起こった。急いで行ってみると、そこには『人事異動通知』なるものが貼りつけてあった。誰かが転勤になったらしい。人の肩越しに覗いてみると、その対象になっている人物は、なんと昨夜、川村まゆみの噂をしていた営業部の連中だった。みんな工場や支店に異動になっている。

特にその中心人物だった岸本は、免職にこそなっていなかったが、最も遠い長野の営業所に飛ばされた上、役職も肩書もついていない。つまりヒラ社員に降格されたのだ。その通知書の余白には、ご丁寧にも、社長の皮崎と常務の原島、それに井林の印鑑が三つ並んで押してあった。あれから彼らはまた会社に戻って来たのだろうか。

その紙面には、あの時一緒にいた水村の名前はなかった。ほっと胸をなでおろしていると、トントンと肩を叩く者がいる。振り向くと、グレーのスーツに身を包んだ住田が立っていた。彼はついて来るようにとアゴをしゃくった。

住田の後に続いて廊下の端に向かった。突きあたりのドアを開けると、そこは非常階段になっている。そこを一番下まで下りると薄暗い地下倉庫があった。住田はそこの扉を押して中にはいった。水村も彼についてその部屋にはいる。

「あいつら、よくもやってくれたな。このままでは済まさんぞ」

住田は低い声で唸った。

「どうするんだ？」

「ぶっ飛ばしてやりたいところだが、そんなことをしたら、あいつらの思うままだ……」
彼は上着のポケットに両手を突っ込んだまま、しばらく思案していたが、「いざとなったら、シズメルしかねえか……」とつぶやいた。
「シズメルって？」
「そのまんま、さ。コンクリート詰めにして、東京湾に沈めるということだ」
「えっ、コンクリート詰めにして海に沈める？　それって、殺人じゃあ？」
「殺人じゃないぞ。殺人というのは人間を殺すことだろ。あいつは人間じゃない。せいぜいゴリラかマントヒヒの類いだ」
水村は唖然として彼の顔を見つめた。そんなことをしたら、こちらが警察に追われる立場になる。あんな下種野郎の命を奪って、殺人罪で一生棒に振るなんて割が合わない。
「心配ない。殺すのは専門家に頼む。俺の友達にそういう仕事をしているやつがいる。新宿あたりを縄張りにしている組織の幹部だ。俺が頼めば安くしといてくれるだろう」
「安くって、いくらぐらいだ」
「まあ……百万ぐらいには値引いてくれるだろう」
「ひゃ、百万！」
「百万で、やつが消えれば安いもんだ。このままじゃ俺たちがやばい。それに、会社がつぶれる」
「そ、それは危ない。やめといた方がいい」
冗談を言っているのではないという雰囲気に、さすがに危険なものを感じた。
「なあに、大丈夫。依頼されたそいつも自分の手じゃやらずに、下請けに出すのさ。下請けのやつも孫請けに出す。絶対、俺たち依頼人に手が回ることはない」
彼は自信たっぷりに言い切った。
「俺たちって……俺もはいっているのか？」
「あたり前だ。ここまで打ち明けたのだ。知らないでは通らんぞ」
彼は凄むように水村を見下ろした。
「ま、待てよ。そんなこと、急に言われても……」
「臆したのか、案外弱虫だな」
「バカ、人を殺す話だぞ。そう簡単に乗れるか。頼む、考えるから時間をくれ」
水村は懸命に食い下がった。
「そうだな、お前は俺と違って修羅場を踏んでないからなあ。決心

には時間がかかるわなあ」
彼はアゴに手を置いてなにか考えていたが「そうだな、少し待ってみるか、俺も段取りを考えなきゃならんし……」とつぶやいた。

それからひと月がたった。その間、住田と水村は何度も伊賀屋の奥座敷で皮崎を倒す計画を話し合った。ある日のこと、彼はメニュー一覧を携えて伊賀屋に現れた。メニューといっても料理の品ではない。皮崎をヤル方法と、その費用の一覧だ。
「俺も最初は海にシズメルのが、一番いいと思った。だが、ダチに聞いたところ、かなり費用がかかるそうだ。資材も揃えなくちゃならんし、人手もいるとか。人件費だけでも百万じゃとても無理だと」
水村はそれを聞いて内心ホッとした。相手がいくら悪人でも人殺しはちょっと御免被りたい。
「そこでだ、シズメルのはやめて、交通事故にしようと思う」
「交通事故？」
「ああ、とにかくやつが大怪我をして、会社に出て来れなくすればいいのだろう」
「大怪我って？　車をぶつけるのか。怪我だけで済むのか。死んだらどうするんだ」
「大丈夫、死にゃしないさ。足の二、三本は折れるかも知れんが」
「足が三本あってたまるもんか」
「三本あるんだ。男には」
「ちょっと住田クン、真面目に言ってる？」
水村が睨むと、彼は「あはっ」と笑って頭を掻いた。
「まあ、それは置いといて、彼らはプロだ。なんでもやるのさ。これを見てくれ、値段のメニューだ」
そして一枚の用紙を水村に見せた。そこにはターゲットの被害状況と値段が書いてあった。
彼の指差すところを見ると、コンクリート詰めにして海に沈めるのは三百万円。それに比べて、交通事故で足の骨二本は五十万円。なるほど安い。
「足の骨一本だと三十万円だが、これだと松葉杖で歩けるからな。ここはしっかり二本とも潰しておいた方がよくないか」
住田も値段表に見入っている。
「まあ……それはそうだな」
「よし決まりだ。足の骨二本」
彼はポンと手を打った。
「うーむ、それもなあ……犯罪には違いないからなあ……」

水村は考え込むように頭を両手で覆った。
「なんだ、まだ迷ってるのか。ケツの穴の小さいやつだなあ」
住田は、水村の煮え切らない態度に苛立っている様子だった。
「まあ、ちょっと待ってくれ。もうしばらく考えさせてくれんか。なあ……」
「しょうがねえなあ。では一週間待とう。来週またこの店に来てくれ。それまでに考えとくんだな。このままじゃ俺たちがやられるだけじゃないぞ。これ以上あいつをのさばらせておくとマジ会社が潰れる。五百人の従業員とその家族が路頭に迷うのだ。やつを倒すことで多くの人が救われる。これは正義だ。犯罪なんかじゃない」
住田はそう言い切ると、テーブルの伝票を摑んでレジに向かった。あわてて水村も立ち上がる。

月が替わって八月になった。
その月の初日、恒例の朝会で、井林が総務部長に就任したとの発表があった。その席で皮崎は「井林君は我が社始まって以来、最も若くして部長になった者」だと紹介した。まるで、『自分に気に入られた者は、いくらでも出世させてやる。逆らう者は降格だ』と言わんばかりの態度だった。

（やはり、こいつをイカしておいてはだめだ）
それまで逡巡していた水村も、ここに来てようやく決心がついた。
段取り、実行はすべて住田の知り合いに委託した。その費用は両足骨折で五十万円。支払いは住田と水村の折半。二十五万円は痛いが、将来を考えれば安い買い物かも知れない。依頼先が住田の『友人』なので前金はいらない、成功した時に支払えばよいとのことだった。

それから毎晩、水村と住田は顔を突き合わせて密談にふけった。
「ダチの計画では、まず場所だが、やはり、やつの住んでるマンションの近くが一番だそうだ。あいつは毎日飲み歩いているが、帰宅は決まって十一時から十二時。遅くとも午前様になることはない。待っている女がいるからな。ところが、その時間帯にはまだ通行人がいるのだ。あの辺りは事務所が多いから、仕事で遅くなるサラリーマンが多いのだろう」
彼はビールを一口飲むと続けた。
「だが日曜の夜は違うな。街はゴーストタウンみたいに寂しい。特にあいつの帰る頃には、ほとんど誰もいないそうだ」
「日曜も、そんなに遅いのか」

それを聞いた住田は「おい、おい」と上目遣いに水村を見た。
「交通費の請求伝票、ちゃんと見てんのか。困るなあ、経理課長がこれじゃ……」
「そういえば……日曜日はたいてい原島たちとゴルフだ。終わって飲み会か。その後、どんなに遠い所からでも、タクシーを使ってマンションに帰る。まだ電車が走っているのに。愛子さんが怒ってたっけ……」
「愛子の方が経理課長に向いてるな」
住田はそう揶揄すると、急に真剣な顔つきになった。
「ここからが本番だ。やつのマンションの入り口は狭い裏通りに面している。狭いといっても普通車が一台は入れるが、タクシーは中まではいって来ない。道の途中がすぼまっていて通り抜けできないんだ。だが、バイクなら通れる」
「バイクでヤルのか」
「ああっ、バイクなら小細工が利く。特に、『膝の骨を折るだけ』というのは高等な技術がいるのだ」
「当たり所が悪くて、死んでしまうなんてことはないのか」
「それはない。なにせ、この手のプロがやるんだから」
彼は胸を張って自信ありげに答えた。
「でも撥ね飛ばすんだろう。頭を打って頭蓋骨が割れたら……」
「大丈夫だ。道の片側は公園になっていて、人の高さの生垣が続いている。撥ねられた奴さんの身体は、そのまま生垣に倒れ込む。頭を打たないから、命だけは大丈夫という寸法さ」
「そう、うまくいくかなあ……」
水村はなんとなく不安を感じたが、「いまさら、なにを」という顔の住田に気圧され、それ以上口にできなかった。
実行は次の第四日曜日と決まった。ローテーションからいけば、その日、皮崎たちは千葉のカントリークラブに行くはずだ。帰宅は夜十一時ぐらいだろう。遅くとも十二時を超えることはあるまい。

その日の暑さは、いつもよりさらに厳しかった。八月ももう終わりというのに、日差しは一向に和らぐ気配もない。近くのコンビニに行くために、ちょっと外を歩いただけで気分が悪くなった。今頃、皮崎たちは汗を垂らしながらコースを回っているだろう。ご苦労なことだ。
でも、それも今日でおしまい。明日から、やつは入院と長いリハビリ生活に明け暮れることになる。ゴルフどころか、会社に出て来ることもままならないに違いない。皮崎という頭さえ潰してしまえ

ば、原島や井林たちイエスマンに、なに程のことができよう。水村はコンビニのＡＴＭから委託費用の二十五万円を下ろして、しっかりカバンに詰めた。

その夜は、ここ吾妻橋のたもとにも発熱した空気が溜まり、黒いフルフェイスのヘルメットを冠った少年の額から幾筋もの汗がしたたり落ちていた。全身を覆うライダースーツの中は汗が蒸れて、熱中症にでも罹ったような気分の悪さを感じていた。一秒でも早くこの仕事を片付けて報酬の十万円を手にしたかった。明日までに上納金を持って行かなければ、自分の身が危ない。

（畜生、早く来ねえか！）

彼は二百五十ＣＣモトクロスバイクにまたがったまま、公園の隅に隠れて今か今かと待ち続けた。

このバイク、車体のあちこちに赤錆が吹き出しており、動くのが不思議なくらいだ。資材調達係が、この仕事だけのために廃品業者からタダ同然で譲り受けたものだ。一応修理はしてあるが、いざという時に使えるかどうか心もとない。ナンバープレートも、もちろんニセモノ。標的をヤッたらそのまま埠頭まで走り、海に捨てなければならない。

待つこと一時間、もうすぐ十二時というところで胸のケータイが震えた。

（やっと来たか）

手に取って耳に当てると「ゲーセンにイクカ」と言う聞きなれた声。「イク、イク」と二回小さく返事してから、スターターボタンを押す。廃品にしては一発でかかった。そのままアクセルを全開にし、フルスピードで公園を飛び出す。一旦表通りを走り、身体を地面すれすれに傾斜させて目的の裏通りに突っ込んだ。古ぼけた外灯の明かりが、千鳥足で歩く一人の男を照らし出している。やや猫背で背が高い。スマホで見せられた標的の男にそっくりだ。

（間違いない！）

彼は前輪を持ち上げターゲットの膝に狙いを定めながら、ヘッドライトをオンにする。光の中に驚愕した男の顔が浮かび上がった。

6

次の日、気はせくが怪しまれてはならない。水村はいつもと同じ時間に、平静な顔つきで出社した。事務所のドアを開けて中にはいると、普段は遅い営業部長がもう席に着いていた。水村の姿を見る

と、「おお、ミツちゃん。大変なことになった」と、大きい身体を丸めて小走りにやって来た。そして親指を立てて「コレが、コレが…今朝、常務から連絡があって……」と呟いた。

水村はすぐ理解した。作戦は成功したのだ。えも言えぬ勝利感が脳内を駆け巡った。だが、わざとすっとぼけて聞いた。

「はあ？　なんです、大変なことって？」

「社長が入院したんだって。今朝、常務から連絡があった」

「に、入院？　どこに？　どうして？」

大仰に驚いてみせる。

「千葉の総合病院。成田駅の近くにあるそうだ」

「な、成田？」

（東京から千葉の成田まで運ばれたというのか。まさか……？）

「ああっ、ゴルフが終わってな、近くの料亭で飲んでいたそうだ。かなり酔っぱらっていたらしい。夜になったから、さあ、帰ろうと立ち上がったところで、そのまま倒れた。なんでも小便垂らして、わあわあ騒いでたらしいぞ。井林がすぐ救急車を呼んで近くの病院に運んだんだと」

普段寡黙な営業部長がいつになく饒舌だ。彼の顔はどういう訳か生き生きと輝いている。このところ、あまりにも社長の皮崎に苛められたせいか「死にたい」などと漏らしていたくせに。

早出していた者が、その場に集まって来た。みんな深刻そうな顔つきだが、喜びを必死に押し隠しているようにも見える。

「なんでも、脳内出血だそうだ。下手すると、痴呆になるかも……」

彼は、『ナイショだよ』というふうに口元に手を当てたが、その声はそこにいるみんなの耳に、はっきり聞こえていた。そして「俺もこれからお見舞だ。ああっ大変だぁ、大変だぁ」と、ピクニックにでも行くような足取りで事務所を出て行った。

水村は狐につままれたような気持だった。

（この話が本当なら、昨夜の決行はなかった、ということになるが？）

詳細がわかったのは、退社後、伊賀屋で住田に会った時だった。彼もまた戸惑ったような顔をしていた。

「やつが飲み屋で倒れたのは事実だ。ただし、昨夜決行はあった」

「えっ、まさか、それって人違いだったってこと？　別人をやったのか？」

「そう、別人だ。背格好が似てたんで、見張りの者が本人と間違えたらしい」

「なんだって、間違えたあ！」

水村の額から血の気が引いた。

「あっ、心配しなくていい。決行はあったが相手は無事だ。バイクを運転していた少年が、ぶつける寸前で別人だと気づいた。相手は、やつのような年寄りではなく若い男だったそうだ。彼はそのままかすりもせずに走り去った。その男は『バカヤロー』と怒鳴ってたらしいが」

それを聞いて水村はへなへなとテーブルに突っ伏した。

（犯罪者にならずに済んだ……）

身体から力が抜けた。

「今朝、ダチから電話があってな、平謝りに謝っていたぞ。『不手際で申し訳ない』って。代金は、もちろんいらないそうだ。もっと早くお前に連絡したかったが、確認を取ってからと思って、いろいろ調べていたのだ」

住田は自分で水割りを作り、さも美味そうに飲んだ。

「脳内出血で倒れたら、普通、半身不随になる。職場復帰はまず無理だな。これは、まさに奇跡。俺はこれまで神の存在を否定して来たが、今は信じてもいいかも、と思っているよ」

彼は感嘆したように何度もうなずいていた。

それから二ヶ月、社長不在の状態が続いた。それなのに会社の業績にはなんの影響もなかった。個人商店ならいざ知らず、従業員が五百人もいるような大組織は、各人の仕事が細かく分業化されている。そこに所属する者は自分の仕事にだけ専念しておればよく、それだけで会社は自ずと回っていく。むしろ皮崎という悪魔がいないせいで、みんなは恐怖感にあおられることなく、のびのびと自分の仕事を片付けている様子だ。

ただ、飲食代だけはあまり減らなかった。皮崎に影響されたのか、原島と井林は相変わらず銀座なんかを飲み歩いている。その仲間には、水村の部下である古橋も加わっているらしい。最初は彼を（若いのによく仕事ができる有能なやつ）と期待をかけていたが、最近は（権力の匂いを嗅ぎ分けるのがうまいキツネみたいな野郎だ）と思うようになった。重要な仕事は愛子さんや渡辺さんに任せるようにした。

そんなある日のこと、ついに皮崎は解任され、親会社から新しい社長が派遣されて来た。

新社長は皮崎と同じくらいの年齢だが、管理畑の人で、性格も彼とは正反対の真面目そうな人だった。

さっそく課長以上の役職を集めて事業所長会議が開かれた。その

席で、前回と同じ様に常務の原島がうやうやしく新社長を紹介し、総務部長になっていた井林が立ち上がって歓迎の言葉を述べた。

「わたくしたちは、今、ここに新しい社長をお迎えしました。このように篤実なすばらしい方は、我が社始まって以来のことと思います。不肖このイバヤシ、社長のため、会社のため、ひいては皆さんのため、誠心誠意、努力する覚悟でございます」

彼はそう言うと握りこぶしを作り、それを天井に向かって「オオッ！」と突き上げた。同席している者もつられて一斉に立ち上がり「オオッ！」と唱和する。

その様子を、新社長は顔を輝かせて見つめ、隣席の原島は満足そうに首を上下させていた。

（了）

（この物語はフィックションです。登場する個人、団体、組織等は、現実の個人、団体、組織等と一切関係ありません）

【編集後記】

文芸「草の丘」の第2号を、発刊する運びとなった。表紙の牧之原公園にある球形の丘も、創刊時の枯れ芝から初々しい若草に姿を変えている。印旛は自然が豊かで、季節の変化も著しい。

今回は、いんば華子が若々しい感性で書き上げた短編を冒頭に掲載、中川とらは、詩に加えて短編小説に挑戦した。唐瀬 光は達者な筆力で、権力者とそれにおもねる男たちをリアルに描いた。香取 淳のＳＦは、核戦争で滅びた人類の話が原発事故と重なり合って、妙なリアリティを醸し出している。

先の見えない不安な時代であるが、自己表現の場として「草の丘」は貴重である。会員の創作意欲も極めて旺盛である。

この会に賛同して、意欲作を投稿してくれる人を求める。（淳）

草の丘　第2号

発　行　二〇一二年 五月二十一日

編集兼発行人　印旛文学の会 香取　淳

連絡先メール katorijun27@gmail.com

ＵＲＬ http://bungeikusano-oka.raindrop.jp